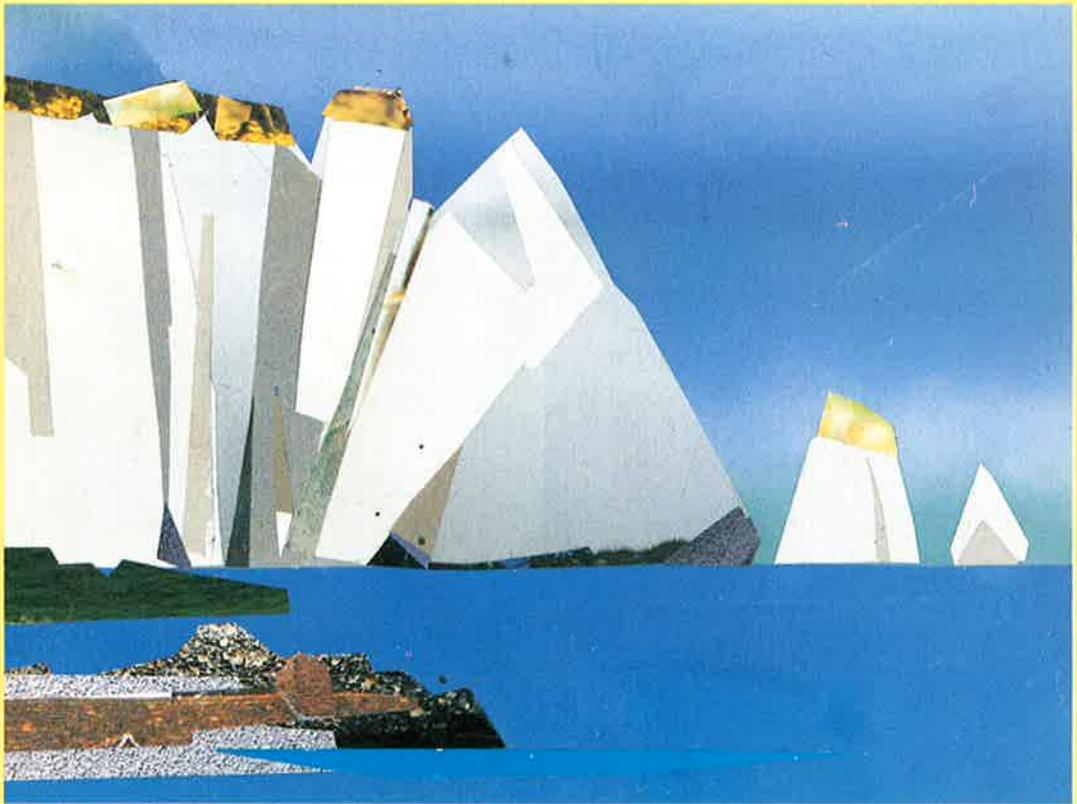


波之鳥

第 12 号 1991



室蘭市医師親交会誌

波ノ鳥

第 12 号 1991

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙 トツカリシヨ (風の岩・沖の岩) 加藤 治良
カット 竹内 隆一・吉井 正仁

挨拶

会長 斎藤 修弥

随想

忘れ得ぬ人々 竹内 隆一 1

三兆候一本槍 高橋 陽夫 4

夫原病型喘息発作 山本 俊一 8

家郷遙けし —— 万葉集・防人歌から 加藤 治良 12

座談会

不老不死の美学 16

安立かほり・池田 洋二・大吉 清・高橋 昭三
編集委員 (加藤・兎玉・斎藤・沢山・三村・村井)
事務局 (高橋・小杉)

あんらくいす

不老・不死に思う……………吉井 正仁

東は東、西は西（東欧紀行）……………上田 智夫

好きな言葉、心に残る言葉や文章……………中村 秀

北海道ドクターズゴルフ大会に参加して……………安藤 修一

親交会旅行観光随筆……………塩澤 英光

室蘭市医師親交会ゴルフコンペ……………鴨井 清貴

編集室へのお便り

親交会のおもな行事

会員異動

編集後記

……………村井 玄乙……………



挨拶

来年は親交会創立四十周年

室蘭市医師親交会会長 齋藤修弥

室蘭市医師親交会は昭和二十七年に長田廣先生、東 栄先生、米沢堡先生などが中心となって創立されたもので、来年は目出度く四十周年を迎えることとなります。

この長い間、親交会は会員の先生方の御協力により、室蘭市医師会と表裏一体の関係を保ちつつ、会員の親睦及び互助制度に大きな役割を果たしてきました。

又、昭和五十五年十月には機関誌『波久鳥』が創刊されましたが、編集委員の熱意並びに執筆に協力いただいた先生方のお蔭で、本年第十二号が発刊されることになりました。このように機関誌が長く刊行されたことは、道内でも余り例がなく、改めて関係者の皆様に心から敬意と感謝を表します。

さて、今日の医療の現場では病診連携の促進、在宅医療、勤務医の増加など新しい変化が続出していますが、こういう時代だからこそ親交会の果たす役割はその重みを増すものと思われまふ。とりわけ機関誌『波久鳥』が会員の趣味又は意見などの発表の場として大いに利用され、その結果会員に安らぎと人生の楽しさを教えてくれる潤滑油として、今後ますます充実、発展することを心から期待しています。

随想

忘れ得ぬ人々

竹内隆一

(竹内産婦人科医院)

その一、太宰治 その出会い

もう遠く過ぎ去った日のことなので月日ははっきりとは思
い出せないが、昭和十四年頃のある日のこと、私達文学好き
の仲間が溜り場である酒場「良ちゃん」で会合をもっていた。
話題は当時出た鏡花全集の中の「高野聖」であった。

高野聖 村松定孝のフロイド的解釈によれば

あの山の魔女は鏡花が幼児期に求めた亡母の変形で、白痴
の良人は男の子が母親を独占したい欲求からいなく父親醜悪
の潜在意識の現われであり、下男にたしなめられて山を下
る旅僧は現世で母と結婚できない幼児の悲しみを象徴したも
のと考えられる。

この小説は鏡花のマザーコンプレックスの顕現された怪奇
譚であつて、この詩人の魂の、若く芳麗のままに逝いた母へ
のひたぶるな愛執こそ異常であり、それなるが故に読者に強
烈な妖しい美的感動を与えるのである。

東西往古の比喩譚が永遠にほろびないのは、それが古代人
の生の根源から発しているからで、若し「高野聖」が永遠の
文学であるとすれば、鏡花も古代人のロマンティズムの灯
を己が詩魂の中に絶やさずにいたためかと思われるのである。

さて話を戻すが

「良ちゃん」酒場は仙台の大病院のすぐ前にあり、医学
部の玄関番という添え書きが看板に出ていた。

その御主人鈴木良太郎さんは昭和初期の洋舞界の第一人
者、有名な石井漢の高弟の一人であった。彼は石井漢、その
妹の小波とともに欧州巡演にも参加したことがあるのが自慢
の種であった。また私達貧乏学生を厚遇して下さった。ある
時ばらいの催促なし、偉くなつたら何倍にもして返してもら
うよ、がその口癖、私達もそれに甘えていた。

話はずんでいる間に長身、特長ある風貌の紺緋を着た三
十すぎの客が入口の障子戸を開けて入つて来た。しばらく一
人で酒を注文して静かに飲んでるようだったが、私達は気
にも止めないで「高野聖」に熱中していた。

その人は太宰治と名乗り私達の話の輪に入つて来た。あと
で分つたことだが、それが「晩年」で天才作家として大きな
反響を呼んだ太宰治その人であった。その時どのような話を
きいたか今は記憶にないが、姪御さんが当時の杉村外科に入
院、手術をうけたので、見舞に来仙したとのこと。

「太宰が オラエさ 飲みに来てな これ置いて行つたの
しゃ」良ちゃんの自慢の種がまた一つ増えた。色紙には「女
生徒 太宰治」とあつた。彼が「女生徒」を出版した頃だつ
た。

太宰の文学には北国の厳しい自然に耐えた原色のヴァイタ
リティーや強さ、そして津軽ごたくにあらわれている津軽衆
の笑いや、ユーモアが見られる。

彼は小学校、中学校の頃から作文のうまい秀才であり、傷

つきやすい内向的な性格であったが、一面おしゃれで、お茶目な道化者であったといわれる。現実はその人に会った感じでは大変人を楽しませる雰囲気をもった人という印象であった。

後年（昭和二十七年）私は青森県立中央病院の創立に参画したので、当時の県知事、津島文治さん（太宰治の長兄）とは時々顔を合わせる機会があった。私も時に太宰の話を持ち出すことがあったが、いつも話題を反らされた記憶がある。

昭和二十三年の入水心中から間もなくで、太宰も斜陽館（青森県金木町の生家）が出来た今日程は評価されておらず、長兄の覚えもよくなかったのではあるまいか、そんな気がする。いずれにしても参議院議員、県知事であった政治家の兄さんには理解出来ない存在であったと思われる。

引用資料

精選 名著複製全集 近代文学館―作品解説 日本近代文学館編 一九七二年

その二、林 芙美子

この人に出会ったのは私が山形高等学校（旧制）二年の時であった。（昭和十一年）

文科の文藝部の招きで座談会がもたれ白哲長身の美丈夫、人生劇場の尾崎士郎も一緒であった。その頃山形高校の文藝部を主宰していたのは駒田信二（中国文学者）、動物文学の戸川幸夫などであった。

駒田信二は今も時々ポイ小説を週刊誌などにのせているが、彼は東大文学部を出て現在は武蔵野女子大の教授であ

る。先日室蘭印刷社長の幸松清さんとの間で話が出て同氏が中国文学に造詣が深く駒田信二をよく知って居られたのには驚いた。私は柔道部に居たが、戸川先輩は寝業が得意で手強い相手だった。

この人たちは文学や小説を力んだ声で口にはしない。にやにやしている。それでいてある確かなものを持っているといった感じであった。

さて林芙美子は小柄な少し赤ら顔のおばさんといった感じの人で、その「放浪記」で一躍名を知られた。

戦前の暗い現実とそこに生きる人間の苦悩を生々しく描きながら、現実への鋭い追求をせず、流転感ともいうべき虚無的な詩情をただよわせる作風である。（三省堂 コンサイス人名辞典）。私は戦後の作、映画にもなった「浮雲」が好きである。

座談会の席には文学に心をよせる女学生も大分集っていたが、林芙美子はこの人達に作家になるための心得として日本の古典を読むことをすすめられた。特に自分は「更級日記」を何度読んだことか、はじめから終りまで暗誦することが出来るかと淡々と語っておられたのが今でも忘れられない。

その三、藤野 恒彌君のこと

魯迅の藤野先生に出でくる藤野嚴九郎先生の令息である。私とは大学で同級であった。

近代中国を代表する文学者魯迅（周樹人）は一九〇四年から一九〇六年までの二年足らずの間東北大学医学部の前身である仙台医学専門学校に籍をおき、ここで解剖学の藤野嚴九

郎先生の教えをうけた。この若い医学生魯迅に深い影響を与えた藤野先生の名は中国の人々にもよく知られている。

当時列強の侵略を前に危機に瀕している故国を憂え、民族の魂を救うのが急務であることを知った魯迅が文学者として歩みはじめる転機となったのがこの仙台である。

いま仙台青葉城三の丸跡に全高五メートルに近い稲井石の巨碑が力強く天空をさしている。この碑には碑名を揮毫した郭沫若の署名以外には一切の個人名は刻まれていない。それは関係者の有名、無名、拠出の多少によって魯迅を敬慕する美しい心に差をつけないという建設に当たった人々の謙虚な気持ちから出ている。

藤野恒彌君は早生れで福井中学校四年から金沢の旧制第四高等学校に入って、それから医学部に入学したので同級生より二ツ三ツ若かった。

お母さんは当時の女子大出で、母乳など飲ませないでミルクで育てたせいか体格はよくなかった。所謂「教育ママ」だったらしく小学校からよく勉強させられたので二飛び早く入って来た。父君の教えもあって当時ドイツ語一点張りの医学部で英・佛語にも堪能であった。

勉強はよくやった。英語で生理学の原書を読んでいて、最後に航空医学教室に学生のと時から入っていた——しかしどうも精神的には少し幼稚であった。

そこでわれわれ悪童共が「夜の街」教育を引きうけ、先ずおでん屋に行つて盃に酒を注いだが飲まない。「どうして飲まないの」と言うとき口中梅毒が恐ろしいという。おでんをとつたら「この皿、消毒しているんですか」という。おでん屋

の皿、消毒した話など聞いたことないので、「では、何か食べませんか」と聞いたら、酒樽の上に飾つてあったバナナの房を指して、「あのバナナ一本——」。結局おでん屋に行つて、バナナ一本で帰つて来た。

我々の頃は徴兵検査があつて、体格のよくない藤野君は「第二乙」だった。憤慨した彼は折角お母さんが送つてくれた着物を缺でズタズタに切つて、そのまま送り歸してしまつた。驚いたお母さんが早速飛んで来たのは勿論である。まあ、若い方々には理解出来ないと思うが、当時は軍隊に行くことは当然のことと思つていたので、このことなどは、当時の「青年気質」の一端と言えよう。

「君は黙つて残つて、航空医学の勉強をしろよ。戦地では君の分も俺が働いてやるから」と別れた。ところがですね、その一年後ラバウル基地でばつたり会つた！ブカブカの兵隊服を着て——。

「陸軍に召集されてやつと来ましたよ、随分なぐられました」学生の頃は酒にも煙草にも無縁であつたあの藤野君が、おぼえずと煙草が欲しいという。私は艦船勤務なので酒、煙草には余り不自由しなかつたが、それでも貴重品だったチエリー（あれはいい煙草だった）の五十箇入りを持って行つたら、目に涙をうかべて有難うと言つていた。その君も間もなくラバウルで戦病死。可愛想でした。

私などまさに馬齢と呼ぶにふさわしい年命を重ね既に人生のたそがれであるが、同級の藤野君との出合ひは昨日のことのように思い出される。しかも君は永遠に若き日の姿のまま

東北大学医学部前庭の緑の繁みの中に「英魂」と刻まれた石碑が建っている。君の名は戦没した学友と共に銅盤にはめこまれて、永久に消えることはない。碑の前には在仙同窓生の有志達により四季の花が絶えることなく美しい。

引用資料

東海林 恒英 魯迅記念碑と仙台 良陵新聞 第一四八号
一九八六年八月五日発行

三兆候一本槍

高橋陽夫

(高橋医院)

時の経つのは全く早いものだ。本誌第五号に「心拍こそ生の証」を投稿してからまる六年が過ぎようとしている。今はよほど前の話ではある。ところでもまる六年が過ぎて、ものなるどころか目鼻さえつきそうでつかないものがここにある。それは、六年もの間、根気よく、もたつきにもたついている「脳死と臓器移植」の問題である。「心拍があっても脳死は人の死か」が論議の中心である。日医はすでに「脳死を人の死と認めてよい」と宣言して久しいが、一般社会の承認は得られず、空振り同様で、未だに日を見る機会に恵まれていない。人間の死は素人でも分かるが、ただ死亡診断書

が書けないだけである。何はともあれ、ひたすら無心に「生の証」すなわち「心拍」を頑強に維持している心臓こそ脳死問題をもたつかせる第一の原因である。

脳死は「医学的に人の死である」とか「医学的に死んだも同然だ」とか、ただ「医学的に」という言葉を借りて死の表現を援護しただけでは一般社会は納得しないだろう。「脳死は人の死」の社会的承認を得るには、まず人間の死の判定基準を示すことである。「脳死の人間はこの基準を満たしている。したがって脳死の人間は死んでいる」と結論づけることが出来るならば、脳死問題は遠い昔に解決している筈である。「脳死は人の死と認めてよい」の「人の死」の判定基準は、自前で一般には極めて理解しがたく、曖昧模糊としている。これがまた脳死問題をもたつかせる第二の原因でもある。

人間の死は、臨床的には、三兆候すなわち瞳孔散大、呼吸停止及び心拍停止に依って、病理生理学的には、全体細胞の機能停止に依って、それぞれ判定することが出来る。われわれは昔も今も、三兆候を基準にして死を判定し、死亡診断書を書いているが、何の不都合も経験していない。おそらく今後とも人間の死は三兆候に依って判定されるものと思う。

三兆候は人間の死を決定する世界共通の、公認検定済みとも言うべき唯一の「死の物差し」である。人間はこの「死の物差し」の規定の寸法（瞳孔散大十呼吸停止十心拍停止）を満たせばすでに死亡した人であり、満たさなければ、すなわち寸足らずであれば未だ生きていることになる。脳死の人間は、瞳孔散大と呼吸停止は寸法を満たすが、心拍停止が寸足らずで規定の寸法を満たしていない。したがって脳死の人間

は未だ余命を生きていることになる。臓器移植医は、この「死の物差し」の使用を極力拒否し、寸足らずでも、すなわち脳死の人間は心拍があっても「死んだも同然」と判定出来る独自の物差しを作ろうとしている。勝手に作った物差しを公的に使用することは勿論計量法違反である。移植医は敢えて計量法を犯そうとしているのである。計量法違反は医師不信に、ひいては殺人行為につながるのではと思う。

かつては、和田元札幌医大教授が、「人助けになるならば法を犯してもかまわぬ」と公言し、最近では、阪大臓器移植チームのリーダー格某教授が、「告訴されてもかまわぬ。われわれはやる」と公言したことが印象に残っている。いずれも独自の「死の物差し」を使用しようとしているのである。またいずれも計量法違反は殺人行為につながることは万万承知していることと思う。兩人共移植術に誘惑され、いわゆる移植亡者になっているのであればさもありなんとと思う。外科医療で、人を助けるとは、体内から異物を除去することであって異物を挿入することではない筈である。

一つの生命は、その二分の一が精神活動（脳）で、あとの二分の一が肉体活動（心拍）である。すなわち二分の一の精神活動（脳）と二分の一の肉体活動（心拍）との和が一つの生命である。一つの生命から二分の一の精神活動（脳）を差引くと二分の一の肉体活動（心拍）が残る。すなわち半死半生ながら余生を生きていることになる。すなわちこれが脳死の人間の姿である。一つの生命から二分の一の精神活動（脳）と二分の一の肉体活動（心拍）を差引けば零、すなわち無すなわち人の死ということになる。したがって脳死の人間は死

んでいるのではなく死んだことにされているだけで、いくばくもないが未だ最後の命を生きているのである。

「脳死患者はすでに死んでいるが、人工呼吸器に依って生かされている」といわれているが、それは逆で、脳死患者が人工呼吸器を利用して生きているのである。すなわち脳死患者の体細胞に生活力が残っている間は、人工呼吸器は作動するが、生活力がすでに残っていないければ、すなわち患者が死んでいるのであれば、人工呼吸器は作動しない筈である。すなわち人工呼吸器は生体には作動するが死体には作動しない筈である。脳死患者は人工呼吸器で生かされているのではなく、当初から未だ生きているのである。体細胞の生活力が失われ、人工呼吸器の利用が不能になれば、ここに初めて死が訪れるのである。

萎れた切り花は未だ生氣があるからすなわち未だ生きているから、水揚げ可能で立ち直らせることが出来るが、萎れてしまった切り花はすでに生氣が無くなってしまっているからすなわち死んでしまっているから、水揚げ不能で立ち直らない。脳死の人間は萎れているのであって萎れてしまったのではない。脳死の人間が未だ生きていることは同じ理屈で理解出来るよう。

米国の某病院で、脳死と判定された患者が、移植のための臓器摘出を始める直前、足を動かす「生命兆候」を示し、急いで集中治療室に転送した、という記事を「脳死患者動いた」という一号活字の大見出しで読んだことがある。移植医は手足の動きには驚愕するが、拍動している心臓の動きには一向平気で驚くどころかその気配さえ窺えないのである。もっと

も拍動は外からは余りよく見えないし、移植医は最初から、脳死は心拍があっても死んだも同然と洗脳されているから気かけないのだろうかと思つたことであつた。

最近いわゆる安楽死が目的とかで、末期癌の男性患者に塩化カリウムを注射し、急性心不全で絶命させ、刑法上の問題になつた事件が報道されたが、これと、他人の人命救助が目的とかで脳死患者から拍動している心臓を摘出し、文字通り急性の心不全を起こさせて患者を絶命させる行為は同じである。いずれも殺人行為として刑法上の問題になるのは当然である。前者は家族の懇請を受け入れ、後者は家族を説得し諒解承諾を取り付ける、といういわば行為の消極性と積極性の相違はあるが、やはり殺人行為には変りないと思う。

脳死からの異種臓器移植は三つの誤謬を犯しているのではと思う。すなわちその一つは、異種臓器（異物）の挿入、その二は、心拍があつても死亡、その三は生体防衛機構の破壊である。この三つの誤謬が是正されない限り、異種臓器の移植は、いわゆる治療法ではなく、娯楽のための、余りにも贅沢な、はかない医術ならぬ奇術に終るのではと深く憂えるものである。問題の異種臓器移植を評して「二十世紀末のあだ花」と言つた御仁がいたが、まことに当を得たうまい表現かなど感心、わが意を得た思ひであつた。

時あたかも、もたもた、すつたもんだの挙句、脳死問題は、恰も土壇場に追い詰められたかのように、ついに行政の場に持ち込まれたのである。すなわち二年期限の首相諮問機関すなわち「臨時脳死及び臓器移植調査会（脳死臨調）」が平成元年十二月に成立した。調査委員には医学関係者の外に、法

律家、福祉専門家、作家、宗教家、文科系学者、ジャーナリスト、経済労働界の代表等が選ばれ、まことに多士済済である。これだけの人種が集まらなければ、「脳死は人間の死であるか否か」が決められないのだろうか。問題を最高裁判所ならぬ行政の場にまで持ち込ませたのは全く医者者の責任である。医者たるものが人の死を診断出来ないのであれば、死亡診断書を書く特権と責務は返上すべきであると思う。医者者の権威と信用は地に落ちてしまつたのだろうか。脳死臨調は「脳死は人の死であるか」を審議するのではなく、むしろ、脳死の人間から拍動中の、あるいは拍動可能の心臓を摘出することの合法性非合法性について審議すべきであると思う。残念ながら脳死臨調委員の中には判決を下す裁判官の顔は見えないようだ。

去る六月十四日に脳死臨調の中間意見が発表されたが、内容は従来の多数意見がここでもそのまま多数意見として報告され、期待したほどの前進はなく、期待はずれでいささか失望した。ただ少数意見が同時に添付答申されたことが特筆すべきだろう。少数意見の主張するところは「脳死は人間の死ではない」であつて、堂々の論陣を張り、一本槍ながら予先は鋭く問題の核心をついている。

多数意見は、日医意見と殆ど変るところがない。日医意見は医師会員全員の総意と受けとれるが、それは会員各自が信念をもって決定した異口同音の総意ではなく、多分に付和雷同的総意であることを恐れるものである。

脳死臨調の答申期限は本年十二月末である。来年一月には最終報告が発表されることになっている。甲論乙駁、いずれ

に軍配が上がるか、引き分けになって再び議論がもたつくことは許されない。法律創造といくか、固唾を呑んで経過を見守っている。

最近たまたま、室医会報の學術特集号第四巻の前書きの中で、第二十三回日本医学会総会に於ける日医会長開会式冒頭の挨拶の中に、次の言葉を読む機会を得た。曰く

「……………医学がテクノロジに走るのみでなく、人間を総合的に見直し、医の倫理をどのように理解し、如何に実践しているのかが問われている現在……………」と。

これは現代医療に対する戒めの言葉すなわち戒律とも受けとれて深く感銘を受けたことであつた。日医会長は時宜を得てまことに良い言葉を言ってくれた、これなるかなと膝を叩いて感激ひとしおであつた。早速にこの戒律の言葉を忠実に守つて（持戒）、脳死と異種臓器移植の問題点を検討して見た。すなわち「異種臓器移植」はテクノロジに走っている、

「心拍があつても脳死は人の死である」は人間を総合的に見直していない、また脳死の患者から生きて動いている心臓を摘出することは医の倫理に反している、ということになつた。これでは脳死患者からの臓器移植はまるで破戒のものであつて、臓器移植を戒めることになる。

日意見は、脳死を人の死と認め、臓器移植を容認している。したがつて医師会側に立つて戒律を忠実に守ることにすれば、異種臓器移植はテクノロジに走っていない。むしろ医術の進歩である。「脳死を人の死と認めてよい」は、人間を総合的に見直せば、脳死は人の死であることが分かる。脳死の人間から拍動している心臓を摘出することは、医の倫理

を充分理解している。ということになり一見持戒そのものであつて、異種臓器移植容認可能ということになるのではと考へられないでもない。しかし医師会の持戒は持戒であつても似て非なる持戒でなからうか。ひよつとすると会長の戒律は持戒と破戒、すなわち表と裏の両面を兼ねた自在の戒律かもしれない。

いずれにしても、来年一月には脳死臨調の最終意見が公表される筈である。脳死からの異種臓器移植が破戒行為か持戒行為か、その時判決が下されるものと思う。もつとも脳死臨調の設立が最初から「脳死は人の死」の社会的合意を得ることが目的であるならば、今更改めて何をか申そうである。諸外国の例に倣つて「脳死は人の死」を早く認める、という移植早期解禁の声が聞えるが、これは、ひたすら移植を追つて人間を総合的に見えない移植亡者の、ただやりたい一心の無茶な叫びではなからうか。

ある医学部同窓会の会合で、酒が十分回つて、宴まさにたけなわ、座が少々乱れかかっている頃であつた。会長の同輩が会長の肩に手を掛け「お前、総会でいみじくもいい訓戒言つたなあ。それで「脳死は人の死」の方はどうするつもりだ。説教もいいが、口先だけでは駄目だぞ、ええ」酔つて呂律が回らなくなつていたようだが、それでも単刀直入まことに辛辣である。人間酒に酔えば本音を吐くもの、なるほどと更に聞耳を立てたとたんに目が覚めた。

異種臓器移植は決して頼れる丸太ではない。異種臓器移植は頼れぬ一本の藁である。

（一九九一年八月二十日）

夫原病型喘息発作

山本俊一

(山本内科医院)

A 夫人の喘息発作には手をやいた。彼女は四十代の肥った口数の少ない女性で夫と娘が一人いる。初診がいつ頃だったかは記憶がない。十年以上も前のことだと思ふ。というのは、初めはごくふつうの喘息患者として受診し、治療にもよく反応、軽快しては通院停止、忘れた頃にまた発作で来る。というふうなことをくり返していたからである。それが二年ほどまえから変わってきた。夜間の喘息発作が多くなり、発作そのものも重症になってきた。しかし、発作時のネオフィリン点滴はあい変わらず効果があった。夜間の発作が強くなってきた時点で入院精査をすすめてみたがぜんぜん受けつけない。そのうちに夜間発作の傾向はますます強まり、ついには、ほとんど毎夜のように、しかも深夜に発作を起こすようになってきた。それに対し、日中の症状は喘鳴でいどに軽くなってきた。結局、急病センターその他の夜間診療施設にご迷惑をかける始末となった。毎夜の騒ぎでは、家族だっているいろいろな面で大変に違いない。このようならば、家族のほうから私の処に何か言ってくるのが普通だが、そんな様子もなく、

あい変わらず入院したがらない。どうも変だ、どうなっているのだろうか、と持て余しているうちにふと思いついた。あ、これは夫原病ではないだろうか、と。夫原病とは、母原病から連想したこの場だけの私の新造語で、夫が原因の心因性の病気という意味である。

母原病とは、ご在じの方も多いだろうが、まだ正式に認められた医学用語ではないらしい。約十年ほど前に名古屋の小児科医、久徳重盛氏（愛知医科大学教授を経て久徳クリニクを開業）がとなえだした仮説のようである。氏は「母原病」ほか一連の著書の中で、豊富な臨床経験にもとづく数多くの症例をあげ「母原病とは、子どもの文明病であり、母親の過保護や放任が子どもに引きおこす心身症である」と主張し、一部のアレルギー性喘息、登校拒否、食欲不振、低体温などなど列挙している。これらの著書を読んでみると、氏の説はなかなか説得力があり面白い。

母原病ということばは、この本の出版当初マスコミにもとり上げられかけた。これらの著書はいまも版を重ねている。だが、何故か「ママゴン」のような流行語とならずに立ち消えとなった。立ち消えの理由の一つとして、この仮説を認めることの怖さがあるのではないかと考えている。なぜなら、この仮説には「何でも母原病」的な拡大解釈を強いる力があり、多くの母親達に「うちの子の頭が悪いのも、身体が弱いのも、みんな私のせいかしら」という深刻な自己批判を招きかねないからだろうと思う。本当に、氏の主張するとおりならば、過保護が悪いのならば、世の母親達はうっかり自分の子どもを可愛がることもできない、ということになるからで

ある。だが、私はこれらの症例のうち難治性の喘息患者Y子の例で示された氏の「あざやかな原因の探求と名人芸のような解決法」には全く驚いた。この症例は、いったい、何を意味するのだろうか、これをどう理解すればよいのだろうか。いつのまにか、私はこの謎にふかく捕らわれてしまった。

そして、自分なりの解釈をするようになっていた。ここで私はY子の例を簡単に紹介し、ご迷惑ながら、それについて私の勝手な解釈を述べさせていただきますと思う。

Y子・大学四年生。九州生まれ。親元をはなれ単身で東京在学中。三才のときから喘息発作になやまされ、このころには重症となり氏を頼ってきた。

母親・氏の印象では、おだやかな大きな愛情を持っている母親のようである。

原因・氏の探求によると、Y子が三才のころ、昼寝中に、母親が彼女ひとり置いて家に鍵をかけ買物に出た。この間にひとりで目覚めたY子は土間に落ちたまま泣いているという事件があった。それ以来、Y子の心の底に「母はこわい」という感じが残り、それが心の傷となり、重症な喘息発作のもとになった。

結末・氏は母親を呼んで、以上の原因を母娘によく説明し、Y子の心の傷をとり除くために母親に面と向かって「お母さんのバカ」と言わせた。Y子は照れ笑いしながらそのことばを口にだした。それ以後、彼女の喘息は急速に快方にむかい、卒業までに退院できた。

本当だろうか、というのが読後の実感であった。こんなつまらないことが原因で喘息発作が起きるものだろうか。どう

考えてみても、Y子の母親が重大な過ちを犯したとは思われない。また、なぜ母親を形だけにせよ面罵することが症状の軽快につながるのだろうか。いろいろな疑問がわいてくる。氏の経験によると、喘息児には、入院するとすぐ軽快し退院すると悪化する、ということをくり返す子が多いという。すなわち、母親と引き離すと小児喘息は良くなることが多い。この経験が母原病説のヒントとなったとのことである。これらの話を考えあわせ、私はY子の謎を次のように分析してみた。

1、生体の防御システム・気管支アレルギーのある者がすべて喘息発作をおこすとはかぎらないだろう。身体には自然の復元力ともいえるべき発作治癒システムが存在するにちがいない。喘息発作とは、体に入るアレルギー量が急増するか、または治癒システムがうまく働かないことを意味するのではないだろうか。治癒システムがあるとすれば、それは身体の種々の器官や組織からなる複合的なものだろうが、すくなくとも、それに副腎が関与していることは間違いないだろう。

2、子どもの側の変化・現在、子どもの情緒の発達のためには、核家族よりも昔風の大家族の方が良いといわれている。

Y子の例についてみると、事件の様子から、Y子は昼間母子二人きりの生活をしてきたようである。母子密着の弊害についてはいろいろな事が言われているが、核家族家庭で母子だけの生活をしていけば、Y子のような事件は誰にでも起きるかもしれない。という訳は、二、三才児では愛憎の感情はかなり発達しているが、言語や判断能力が未発達だからである。それ故、彼女の事件をかんたんに言えば、Y子は母親の外出

を、母親が故意に自分を置き去りにしたものと誤解して恨み、また置き去りにされるのではないかと怖れた、ということではないだろうか。ただし、Y子はこの時の母親に対する怖れは記憶しているが、恨みは意識していない。大家族で暮らしていればこのようなことは起こりにくいだろう。母子密着は、子が母に過度に依存する状態でもあるから、子どもは母親に対し強い恩愛の情を持つようになるだろうが、同時に、このような不安や誤解それに伴う恨みなどが生じる可能性も大きいものと思う。そして、ときにはこの恨みや憎しみが解消されないまま、強い恩愛感情に抑圧されてしまう場合もあるのではないだろうか。Y子はこのような心の葛藤状態にあったものと考えられる。

3、喘息状態と攻撃性・むかし、三十年もまえ、まだステロイドが無かったころ、気管支喘息の薬といえば抗ヒスタミン剤、ボスミン、ネオフィリンぐら이었다。そのころ医者に成りたての私は、喘息の薬は喧嘩の薬だなあ、という感じを受けていた。血圧を高め、心臓をドキドキさせ、気管支を拡張させるなど人間を闘争気分誘い入れるような薬だと感じたのである。Y子の結末はすぐにその記憶を呼び戻した。アレルゲンが身体に侵入して喘息状態になると治療システムが動きはじめ。そのシステムの一環として、気管支の狭窄を早急に抑えるために、髄質ホルモンの放出が必要となるのではないだろうか。ここで、一つの仮定「喘息状態になると、無意識的に何かを攻撃して髄質ホルモンを放出する必要性が生じる」が成り立つとしてみる。

以上三つの私の勝手な推測や仮定を許してもらえらるならば、

Y子の例をつぎのように説明できないだろうか。

喘息状態になると、彼女は無意識的に何かを攻撃したくなる。このとき、攻撃したい相手はつねに母親である。なぜかといえば、母親こそがY子の心の底にひそむ、最も古い生まれで初めての、まだ消えていない恨みの相手だからである。しかし、この攻撃欲求は同時に恩愛感情により無意識的に抑制されてホルモンは放出されない。そのために発作を抑えることができない。この恨みが消えないかぎり、同じことが繰り返される。もし、事件が三才以前の出来事であったならば、その記憶が残らなかった可能性もある。そうだとすれば、母親と離れた東京の学生生活は彼女の喘息を軽くしていたかもしれない。だが、発作のたびに記憶の片隅にかすかに浮かぶ事件の思い出が無意識的な母への恨みを強化して重症の発作へと進んでいったのだろう。その母親への恨みが、氏の説明により意識化され、「お母さんのバカ」の一言で急速に消えた。とさえないだろうか。

ばかばかしいと思われるかもしれないが、ことの顛末はこんな程度のものではないかと私は考えている。ちよつとした誤解がその後の人の一生を左右することなど、大人の世界でもよくある話である。A夫妻の場合も、始めの夫婦仲はともも良かったそう。私のような女をよく貰ってくれた、と夫人はいつも夫に感謝していたとのことである。それが、どこかで行き違ったのだろうか。

もしY子のように攻撃行動の障害がなければ、喘息児達はどうしているのだろうか。喘息状態になると、彼らは手近に攻撃目標を求め、たとえば、たいした理由もなく友達をこづ

いてみたり、飼猫のしっぽを引っぱったりなどの悪さをして発作を抑えているのではないだろうか。

A夫人の喘息発作はすっかり午前二時に定着してしまった。昼間の強い発作はまったくなくなり、ときどき軽い喘鳴で吸入にきては私にその後の経過を報告してくれた。相変わらず入院を拒み、深夜の発作で、夜毎あちこちの病院を悩ませているらしかった。このころになると、私は夫人がもし入院したならばこの喘息発作はどうなるだろうか、大いに興味をおぼえるようになっていた。

とうとう、夫人の喘息発作は八方ふさがりになった。どこかの病院にも持て余され、やむを得ず、私の紹介でM病院に入院することになった。翌日さっそく、私はM病院に夫人の病状を問い合わせた。発作はなかった。入院その夜から、連夜の喘息発作はびたりと止まった。入院後の経過があまりにもよいので、院長が退院の話をもちだしたところ、その夜さっそく発作を起こしたとのことである。

母原病説以来、私は喘息児を診るとき、できるだけ、母親との関係に注意するようにしてきた。たしかに、母原病喘息と思われる子を何例か経験している。いまでは私は、我田引水的な見方と承知の上でだが、気管支喘息患者は大人も子どもも、発作が起きそうになると、無意識的に何か攻撃的行動をとっているのではないかと考えている。とくに、この攻撃的行動は発作による気管支狭窄にたいする身体の早期反応の一環として重要な役割を果たしているのではないかと考えている。攻撃行動としては、喧嘩、口論などの直接的攻撃ばかりでなく、ちよつとした悪戯とか、運動とか何かに挑戦す

るとか、心を緊張させるいろいろな形の行動が考えられる。ときには、患者は何か特定の目的に挑戦する頑張り屋の形をとっているかもしれない。このようならば、その目的がとつぜん消滅すると、たとえば、定年退職、住宅ローン完済などをきっかけにして喘息発作をおこすことも考えられるだろう。

A夫人のその後についてはよく判らない。Y子の例にならつて、彼女の夫に事情をよく説明し、彼女に「おとうちゃんのパカ」と言わせてみたいが、これは夫婦のプライバシーに係わることだからそうもできない。



10年前位に波久鳥3号に中島町1丁目界隈のデッサンを載せて頂いたが、その頃と今では街の様相にあまり変化はない。

10年1昔というのに、電線が地下埋設になり、愛生病院の場所に「わかさいも」ができた位で発展の鈍さに別の意味で驚く。

(絵・文 吉井)

家郷 遥けし

万葉集・防人歌から

加藤 治良

(加藤内科医院)

防人(さきもり)は崎守である。おもに筑紫・壹岐・対馬に派遣された北九州警備の兵士で、畿内・西国はじめ諸国から徴発されたが、天平二年(七三〇)以後は武勇をかわれて東国から集められた。任期は三年、毎年二月に三分の一を交替させた。集結地は難波津、ここから海路九州に向ったのだが、難波までの路銀や武具は各自が用意すべきだったらしい。もちろん、兵農分離の時代ではなかったから、日常は殆どが農民だったわけだ。

万葉集巻二十に収められた八十余の歌は、彼等一般兵士たちの、家郷を発つ日、道中、あるいは難波での、それぞれの心情をうたったもので、勝宝七年(七五五)に当時、兵部少輔(ひょうぶのしょうふ)の役にあつた大伴家持が、彼等を引率してきた諸国の受領使を通して提出させ、そのなかからほぼ半数を選んだ。

戦中派の少年が、防人の歌として、まず聞かされ覚えさせられたのは、「今日よりは顧みなくて大君の醜のみ楯と出で立つ我は」だった。そして、防人歌とは、これに類した忠誠勇武の歌が殆どなのだろうと思つていた。戦後二、三年して万葉集の全巻を手にしておどろいた。颯爽たる歌は、なんとこれ一つだけなのだ。

妻子父母との別離の嘆き、故郷山河を想い、さらには筑紫

への船旅によせる不安。選者、家持の意図——めいたものすら感じられる程に、率直に歌っている。巧みさも、「振り」もない、だが、「ああ、詩とは、こういうもの」と痛切に思い知らされ、どんな御時世がやつてこようと、簡単には風化することのない「心の根っこ」みたいなものを改めて感じさせられた。

人工花には冷淡になり、野の花、雑草にさえも目を細めるヒトになつたのも、それ以来のことである。

*

まず、この歌、

○ 布多富我美 悪しけ人なり あたゆたひ

我がする時に 防人に差す

ふたほがみ あしけひとなり あたゆたひ

わがするときに さきもりにさす

「憎い布多富我美のやつめ、こんな時に防人に指名しやがつて……病気なんだぞ、この俺は」 布多富我美は国守なのだろうか。みごとに恨み歌だが、詠んだこの男も常日頃からあまり他人に好かれていなかったような匂いがして来る。

○ 父母が 頭搔き撫で 幸くあれて

言ひし言葉ぜ 忘れかねつる

ちちははが かしらかきなで さくあれて

いひしけとばぜ わすれかねつる

どこかにまだ残っている、少年の面差しが浮んでくるようだ。ケトバゼはコトバゾの訛り。

○ 松の木の見れば 家人の

我を見送ると 立たりしもころ

まつわけの なみたるみれば いはびとの

われをみおくと たたりしもころ

「出発の朝、見送ってくれた家族の一人一人みたいに、あの松並木が……」 道中詠だろう。ケもイハビトも訛り。

この歌には私なりの情景がある。海軍軍医学校への入校だから、家に三日程帰って、そのままさらっと出かけるつもりだったが、町内の人たちが、どうしてもダメだという。結局小学校の校庭に予科練（飛行予科練習生）合格の少年の横に並ばせられ、挨拶までさせられるはめになった。

そのあと、駅まで行列したのだが、家の前に並んで立っていた、店のあんちゃんたち、ねえや、近所の親しい小母さんたちが、万歳をしようか、どうしようかと迷っているような様子に、学生服にゲートル姿の私は、いいよいいと小さく手を振って通り過ぎた。しかし、その時の一人一人の表情はだいぶ後まで鮮明に残っていた。

○ 旅行きに 行くと知らず 母父に

言申さず 今ぞ悔しけ

たびゆきに ゆくとしらず おもししに

ことまをさず いまぞくやしけ

「こんな長旅になると知っていたら、もっと、きちんとした挨拶をして来るんだっのに……」

これもわかる。一千年の後、似たような思いを口に出していた息子たちを少なからず知っている。シシはチチの訛り。

○ 我が門の 五本柳 いつもいつも

母が恋す 業りましつしも

わががづの いつもとやなぎ いつもいつも

おもがこひすす なりましつしも

「いつも風に揺れていた五本の柳、いつも忙しげだった母さん……。案じつづけているんだろなあ、俺のことを」

柳の木は幼い頃からの遊び相手だったのかもしれない。

*

妻、子を懐かしむ歌も当然に数が多い。そのなかから、

○ 我が妻は いたく恋ひらし 飲む水に

影さへ見えて よに忘れず

わがつまは いたくこひらし のむみずに

かげさへみえて よにわすられず

終戦の前後、ほろ酔いでよく歌ったズンドコ節がある。

酒よ飲め飲め酒よ飲め 涙とともに飲む酒の

ほろろ苦さよ 盃に 映ったあの子も泣いていた

○ 我ろ旅は 旅と思ほど 家にして

子持ち瘦すらむ 我が妻かなしも

わろたびは たびとおめほど いひにして

こめちやすらむ わがみなしも

「食べ盛りの子供に、田畑仕事……瘦せただろうな。おまえの苦勞にくらべたら、おれの筑紫行きなど楽な旅よ」

オメホドはオモヘド、イヒはイへ、コメチはコモチ、ワガミはワガメの訛り。

○ 防人に 立たむ騒ぎに 家の妹が

業るべきことを 言はず来むかも

さきむりに たたむさわぎに いへのいむが

なるべきことを いはずきむかも

「旅立ち騒ぎに取り紛れ、すまない。田畑のあれこれ、言い忘れてしまうた」 サキムリはサキモリ、イムはイモの訛り。

○ 家風は 日に日に吹けど 我妹子が

家言持ちて 来る人もなし

いへかぜは ひにひにふけど わぎもこが

いへごともちて くるひともなし

「東の風が吹く日には、空を見上げる私なんだ。風に乗っておまえの便りが……もしやと」

○ 道のへの 茨の末に 延ほ豆の

からまる君を はかれか行かむ

みちのへの うまらのうれに はほまめの

からまるきみを はかれかゆかむ

「茨の先にまつわりつく豆のように、別れの朝のおまえ」

○ 我が妻も 絵に描き取らむ 暇もが

旅行く我は 見つつ俵ばむ

わがつまも 糸にかきとらむ いつまもが

たびゆくわれは みつつしのばむ

「あわただしい出発には違いなかったが、俺は今とても悔やんでいることがある、それは……」 イツマはイトマ。

○ 葦垣の 隅処に立ちて 我妹子が

袖もしほほに 泣きしそ思はゆ

あしかきの くまとにたちて わぎもこが

そでもしほほに なきしそはゆ

汽車の窓から手を握り 送ってくれた人よりも
ホームの陰で泣いていた かわいあの子が忘れぬ
(これもズンドコ節)

○ 千葉の野の 兎手柏の 含まれど

あやにかなしみ 置きて高来ぬ

ちばのぬの このてかしはの ほほまれど

あやにかなしみ おきてたかきぬ

兎手柏のようなあどけなき

だから、手を触れずに……遠く来て

旅の空、遥かに想う

「浅き契りだに結ばず」と婚約者に遺書をしたため、海底に沈んだ友人がいた。慌たらしい一夜を悔いている、と洩らした男もいた。そのあたりは微妙だ。軽々に評すべきではない。十世紀を隔ててはいてもその微妙さは、なお変らない。

○ 我が門の 片山椿 まこと汝

我が手触れなな 地に落ちもかも

わがかどの かたやまつばき まことなれ

わがてふれなな ちにおちもかも

「だいじょうぶだろうな、言い寄るやつなど居らんだろうな……俺が帰るまで待っているよ」

○ 障へなへぬ 命にあれば かなし妹が

手枕離れ あやに悲しも

さへなへぬ みことにあれば かなしいもが

たまくらはなれ あやにかなしも

「出来ないことは百も承知だ。だが、戻りたい、帰りたいんだ——おまえの傍に」

○ 防人に 行くは誰が背と 問ふ人を

見るが羨しき 物思もせず

さきもりに ゆくはたがせと とふひとを

みるがともしき ものもひもせず

「誰のご主人かしら」なんて、見送りの中には無神経な……でも羨ましい女の人も居りましたの——。

妻が詠んだ歌は、この他に数首載っている。

*

船を飾り、武具を装い、筑紫に向う日が来る。見送りの中に居るはずのない母への呼びかけ、故郷の人々にやはり見てもらいたい船出の晴れ姿……難波津での歌が並ぶ。

○ 父母え 斎ひて待たね 筑紫なる

水漬く白玉 取りて来までに

とちははえ いはひてまたね つくしなる

みづくしらたま とりてくまでに

「いよいよ船出です。筑紫の土産は真珠にしましょう。どうかそれまで、父よ母よ、お健やかに、私の無事をば祈っててください」 トチはチチの訛り。

○ 行こ先に 波などゑらひ 後には

子をと妻をと 置きてとも来ぬ

ゆこさきに なみなとゑらひ するへには

こをとつまをと おきてともきぬ

振り向きつ 妻ま幸くと

振り返り 我子すこやかと

はるばるに 難波集いて

はるばると 筑紫へ行かん

沖つ風 強くな吹きそ

沖つ波 高くな立ちそ

筑紫その果て

さて、次の二首、文字からの印象では対比が目立ち両極の座を思わせる。だが深層を彩る色調に寒暖ほどの差があるだろうか。乾と湿との「歌いぶり」の違いではないだろうか。

○ 今日よりは 顧みなくて 大君の

醜のみ楯と 出で立つ我は

けふよりは かへりみなくて おほきみの

しこのみたてと いでたつわれは

○ 韓衣 裾に取り付き 泣く子らを

置きてぞ来ぬや 母なしにして

からこるむ すそにとりつき なくこらを

おきてぞきぬや ははなしにして

座談会 不老不死の美学

安立かほり・池田洋二・大吉 清・高橋昭三

編集委員 (加藤・児玉・斎藤・沢山・三村・村井)

事務局 (高橋・小杉)

平成3年7月25日 於：“しらかば”



高橋 (愛育小児科医院)



大吉 (大吉整形外科医院)



池田 (池田耳鼻咽喉科医院)



安立 (安立医院)

三村 では、私からちよつと。今回は老いの哲学というか、老いの美学ということなんですが、私なんかも壮年期を迎えるようになります、正直、老いを感じる事もあるんですが、そんななかで、私たちがどのような生き方をしていったらいいのか——そういうことをテーマにして楽しんで（笑）、いや、楽しくお話しをしながら有意義な時間を過ごしていただきたいと思います。加藤先生に司会をお願いをして……………。

加藤 二、三の先生から、「美学」ってどういうこと？ というお電話をいただいたんですが、これは安立先生への敬意の表れでございまして（笑）……：他意はありません。テーマを酒の肴にして、というわけですから、あまりご立派に長命されていらつしやる方と、半端な若さの方は敬遠いたしますとネ、今日のお顔ぶれということになるんでして（笑）。まあ、一杯……………。

話は煙草から

加藤 三村先生、脳細胞は平たくいうと一代でしょう。活動年齢のピークがあつ

て、これ以上なにかにしてもダメ、というのは何歳ぐらいですか？

三村 個体差がありますね。寿命が延びたために壮年期が非常に長くなったといわれる時代なんです、私たちが老人性という傷病名をつけるのは五十五歳からで、六十ぐらいから一般に喪失の時代に入り、いろんなものが奪われていくんだと思いますね。老成自覚が生れてきて、「死」との対面を考えるようになってくる年齢ですね。

大吉 脳細胞の欠落が始って来るのは？ 三十歳ぐらいから減ってくるんだという話を聞きますね、頭を使うと連絡路は増えるけど。細胞分裂だけでいえば百十五から百五十歳の間が限度らしいですよ。

加藤 ギネスの記録によれば、人間の長寿者は百十五歳で、動物の最高はある種の亀が百五十年だそうですね。

三村 老年期になって脳循環が悪くなる、内臓のあちこちに機能脱落が起きてきますしネ、煙草なんか喫むとどんどん落ちてきますね（なぜか大笑）。それと二十代三十代から大酒家といわれる人は統計的にはやはり早くボケがくるようですね。

安立 あら、先生、煙草すつていらつしやるの？

三村 ええ、ぼく、ヘビースモーカーですもの。（哄笑）

安立 私も以前すつてたんです、罪人みたいに小さくなって……。八、九年前から、何の苦痛もなしにやめられたんです、六十五日間。もう大丈夫と喜んでいましたら、珍しい外国煙草を頂きましてネ、どんな味だったって言わなくてはいけないんで、一本だけ味見したんです——そうしたら、前に輪をかけて喫むようになつたんです。でも、苦痛なしにいつでも止められるという確固たる信念の下に喫んでますけど。（笑）

大吉 煙草を喫む人はネ、何か効果がないもんかと探してますけど、トータル的にはマイナスの方が多いですよ。ぼくは六十本喫んでたんです。外来で午前中に二十本、午後から二十本、家に帰って二十本。ある日突然やめたんです。きっかけは狭心症の発作——呼吸したくても出来ないんですよ。きっかけがなくて止めるのは珍しいですね。

安立 ストレス解消には役立ちますね。私は煙草では死ねないと思うんです。心

筋梗塞らしい症状もいつさい無いですし。ストレスには参っちゃうんです。なにもかも一人で解決しなければならぬ、そんな時の一服にどれだけ助かっているかわからないんです。

大吉 これも個人差ね。

高橋 統計では、四十五歳まで喫ついたら止めても止めなくても、たいした事は無いっていうし、ここまで来たら先生も面白いんじゃない。(笑)

三村 ところがですね、煙草は、ぼくはいいと思うんです(笑)。でもボケた時に困るんです。あぶないんです。入院の理由にもなっているんです。まあ、心筋梗塞にでもなつてコロッと死ねばいいんですがね。そう簡単に死ねませんよ。

不老長寿の希い

加藤 若くありたい、若くいたい。そのための方法は？ については色々とお話が出ると思いますが——不老長寿・不老不死というのは、そもそも中国のものでしよう。

池田 そうですね。

加藤 西欧では宗教の天国思想があり、

仏教には極楽がありますよね。秦の始皇帝や漢の武王なんかがひたすら不老不死を求めただけで、毎日が辛くて仕方がないという人達の希うもんじゃないですよね……どんな処方なんでしょう、不老長寿の処方ね。

池田 あるらしいですけどね、秘薬が。

水銀の入っているのもありますよ。

加藤 「金丹」は硫化水銀なんです。

池田 ヨモギも非常にいいという先生も多いですよ。

加藤 田道間守(たじまもり)が帝の命で探しに行ったのは柑橘類でしょう。調べてみると、仙人には、三段階があつて天仙、地仙、それと死後に魂だけ抜けてなるシカイ仙とかいう——その違いは、修業と仙薬の程度なんだそうです。

高橋 現世の楽しい人が不老不死を希うというのは解りますね。極楽浄土なんかは後から出てきたんでしょうし、後生をねがって、早く迎えが来ないかなあ——って願うお年寄りが今は多いもんね。

池田 信じていればいいんだ。われわれなんか、後生転生があるのかないのか、さっぱり解らんからな。

加藤 三島由紀夫はそうじゃないかな。

スパッと美学的に格好よく死んで。

池田 スパッとやりましたね。

加藤 彼は転生ということをずいぶん書いていましたね。あれなんかも考えようによつては不老不死への実践といえるかもしれないですね。

大吉 最近、患者さんのおじいちゃん、おばあちゃん、早く迎えが来ればいいという人がふえているようで、ひと月前前に死ぬ直前の遺稿を読んだんですけどね。生きる死ぬが問題になるのは元気でいる間のことで、いよいよとなれば、「死」は考えている程こわいものじゃないって……。

沢山 適当にボケてくれるから怖くないんじゃないかな。

加藤 どうなんでしょうね、脳はそのままにしておいて、タイミングよく臓器を取り替えていったら、百五十歳まで生きられるなんてことになるだろうかと思えているんだけど。

(大変なことになってきた。誰が誰かわからなくなってくる。——笑——)

沢山 脳さえ残していたら、その人なんだから……脳が死んでしまったら、もうその人ではない。脳死の問題にはそうい

う考え方もからんで来ますね。

加藤 臓器移植がどこまで進んで行くかわからないけど、現代人の心の底にも何千年も昔からの不老長寿の願いが流れている——そういう事なのかなあ。

大吉 結局、不老長寿はあり得ない、とすれば、いかに長寿を保つかという話題に移った方がいいんじゃないですか。

加藤 ええ、時間はたっぷりあるんで、まず前座でこんな事をしゃべってないと座談会が早く終ってしまう。(笑)

池田 ああそう、はいはい。(笑)

三村 臨死体験ということですがね。死を一瞬味わった人の体験——それは夢も同じなんです。走馬灯のような、一枚の写真なんです。死の一步手前で魂が抜け出て行くときの体験を語る人が増えているんですが、これなんか、どういったらいいんですかね……。

加藤 三村先生はどう思いますか？荒唐無稽だと思いますか？魂とか、霊の事。

三村 いいえ、滑稽とは思いませんネ。あり得ると思います。(ほう——)

高橋 今やたらと写真が証拠品になってますね、死霊の存在証明に。テレビで盛んにやってる。

沢山 そんな感じ受けた事ありますよ。

誰か亡くなった時、ああ、あれがそうだったんだなあ。でも、偶然の積み重ねかな、とも思えるけど。

加藤 肉体から遊離しても魂だけは流れて生きている、そう信じたい、と思ってる人も結構いるんじゃない？しあわせですよね。

ボケる、呆けない

池田 とし取って来るとね、淋しい暗いイメージばかりふえてきて(先生が？)

いや、そういうお年寄りがふえてくるのはね、子供や孫に家の中を占領されて、邪魔にされるからなんで、病院に入ったからって明るくなるわけじゃない。

加藤 私たち子供の頃は、畳の上でじいさん、ばあさんを送りましたよね。思い返してみても暗い印象はなくて、むしろ「包まれていた」という感じでした。今は子供から見ると、具合が悪くなって居なくなると病院で死ぬまでの間、まばらな印象しかない。

沢山 家族全体に「看取る」という心が薄くなると、情緒が乾いてしまった……。

高橋 子供は、普通父親の態度を見て

じいちゃんに接するものでしょう。家族みんなで見取って畳の上で成仏させたのが昔なんだけど、室蘭はまだいい方で、東京なんか狭い家の中では邪魔にされるだけでしょうが。きびしいですよ。

(いちばん働く親父でさえ粗大ゴミなんだから。——笑)

高橋 年寄りの面倒を見るエネルギーは大変なものですよ。私の母ですけど、だんだんボケてくるし、その時私一人だけだから三交替で人頼んで、夜はイヤだというから結局四人になって、経済的にも大変ですよ。だから今の若い人達に畳の上での看病を要求するというのはねえ、子供のことや何かで殊に忙しい時代ですからねえ。そして、ボケてくると一人息子にさえ「あんた誰？」なんて言うくらいだから。(笑)

池田 ボケる人は何%ぐらいですか？

三村 六十五歳以上で何人に一人という統計は取りにくいと思うんですが——、ある日突然に物忘れというんじゃないかな。その日までの過程があるんですね。まずとしを取ると頑固になって判断力が落ちてきて、そのために家族問題が起きます。

社会的には立派なおじいちゃん、他の人からはいいおばあちゃんと言われていますが、家庭内では色んな問題が起こっているんです。そのうちに、お名前は？ と聞くと「美空ひばり」になるんですね。

当然、その人の性格や人生観、お人柄がポケ方に関係してくるわけで、私なんか女房に、あんたは色ポケ、トポケと言われていきます。エヘヘ……。 (笑)

兎玉 息子たちも立派になって、大切にされてる方がむしろポケ易いってことはないですか？

三村 うーん、あるとは思いますがねえ。長生きのできる方は、だいたいが頑固というより自己主張の強い人です。

加藤 政治家、芸術家には昔から八十を越える人がざらでしたね。

三村 要するに自己主張と自己表現のできる人が長命なんです。

加藤 開業して三十年になるんだけど、私の周囲を見たり聞いたりでは、出来上がったポケ老人の数は昔とあまり変わらないような感じなんです。むしろ家族が気早に騒いでいる感じ——毎日、町内を歩いてみたいだろうし、食物がうまくけりや四度でも五度でもいいだろうし、話

が合わなけりや口をききたくない、そんな程度でも、サアたいへんと慌てる家族も多いんじゃないかな。今や、ポケ恐怖症時代だから。

三村 ポケといつても、アルツハイマー型もありますけど、一番問題なのは社会的に家庭的に役割を失ったときに、どういう反応、どういう行動がとれるかということ——どのような精神的な世界を作ることができるかがポイントになると思いますね。依存性の強い人はポケ易いんです。

加藤 ばあさんに亡くなられると、まずじいさんは駄目だね。しょぼんと落ち込んじゃって、急にポケ状態になる。少なくないですね。

池田 逆の場合はどうです？

(ばあさんは落ち込まないよ。——笑——)
安立 父が亡くなりましたら、母はものすごく元気になりましたよ。父はひどい頑固者でしたから、我が世の春って感じなんです。母親は現在九十五歳なんです。私の傍に家を建ててやりましてね、借家人を入れて管理してるんです。冷たいようですけども私は、いいお嫁さんの中に育ったお舅さん、お姑さんは早くポケ

がくるんじゃないかと思っと思っていますから窓、玄関の戸締まり、ガス・水道の栓、全て責任を負わせたんです。とても立派に管理しているんですけど、その責任感を持続してるんじゃないでしょうか。自炊してるんですよ。だから私は、尽くし過ぎるお嫁さんはお姑さんを早くポケさせてしまおうと痛感してるんです。

(そういうことなんですね)

色んなこと、昔のこともよく話し合うんですよ。喧嘩もすべきですよ、それだけ躍動感にかられるじゃないですか。

大吉 うん、鋭いですよ、頭が。

高橋 だから先生は、お若い。

沢山 ポケていられませんね。

安立 親が居てポケてられませんよね。

今、男の子が赤いTシャツ着てますでしょう。おかしいって言いますけど当人が満足していれば、他人が違和感を覚えたっていいじゃないかってネ、勝手な理屈をつけて私は派手に生きています。

……でも、自己満足。

加藤 いやあ、それですよ。美的意識を自分なりに作り上げて続けてゆく人、男でも女でもネ、それが失くなったらもう

“生ける屍”ですね。(笑)

池田 私のとこへ来るお年寄りの中に、オヤ、臭いな、おしっこ洩らしたナってわかる場合があるの。でも当人は感じないんだ。それじゃ駄目なんだな。

加藤 汚さに対して神経質でいるうちはボケない。

児玉 九十一歳のおばあちゃんの話ですがね。息子は実業家で七十歳なの。おばあちゃん具合悪くなって救急車呼んだの。救急車が停ったら、おばあちゃんがネ、ちよつと待ってってくれって言っただって入院するんだったら化粧道具を持って行かなくちゃいけないというわけ。

加藤 見られているという意識ね。

児玉 そう。普段からしつかりしているおばあちゃんだから、殊に納得できるの。高橋 やはり自分の存在感を主張できないとね。ぼくはPTAと長かったから色んな先生を知ってるんですけどね。定年になって二、三年もしてからお会いすると、あつと思うほど老けているんです。国鉄、警察の方にも多いです。現職の時のようにするべき仕事がなくなってしまうと、着ているものが右前でも左前でもいいや、という感じなの。安立先生の

お母さんのように責任持てる仕事があれば、ああはならないだろうけど、なかなかそうもいかないんじゃないですか。

加藤 安心していられるお年寄りというのは、一人で留守番ができるという事なんですしよね。心筋梗塞・脳梗塞の心配をのぞけば、ネ。

三村 肉体的に何もなくて、精神的に強く生きられるということが“長生き”ということですよ。小森和子さん、あの映画評論家の——ぼく、東京で時々お話ししたことあるんですが、八十三歳なんです。へんなこと言うようですが、色気を感ずるんですね。色んな話を伺うと精神的にすごく豊かなんですね。錯覚するくらい若いんですよ、ほんとに。

高橋 北杜夫のお母さんに、ぼく、三回ぐらい会ってるんですけどね。北極に行ったり、あちこちに旅行したりして——八十いくつだつていうのに、今日つけた頬紅いかとかサ、服はどうかとかサ、とにかく、おしゃれなんだなあ。あの年になって、着飾りたいという神経もっているうちはボケないですね。

安立 今回、名古屋でクラス会があったんです、室高女の。私より七、八つ年上

の方がネ、とても若いんです。非常に派手で、よく似合うんですよ。さすが都会人だなんて感心しちゃったんですがね。一番年下が私だったんです、それが花見のバスの中でギックリおきちゃったんです(笑)。ようやく落ちて着いて、車椅子にネ(笑)、生れて初めて乗ったんですよ。みんなにいたわられて、押ししてもらっても、優越感なんてとんでもない。人間やっぱ脚のある間は自分の脚で歩かなくちゃ——と、いい経験しましたよ。

「気」を乱すな

加藤 われわれの年代は儒教的な空気のなかで育てられて来たんだけど、おしゃべり、色気つてのはいいですね。必要ですね。そういう意味からいうと、今の少年たちはどうですか？ われわれよりボケが少なくなると思いますか？

安立 いや、早いんじゃないですか。

児玉 今の子供はね、お母さんの顔しか見ていないよ。お母さんでない、あなたに聞いているんだよ、って言うの。

大吉 まず子供に聞いて、それからお母さんに聞くようにしてるんだけど。

沢山 お母さんを通さないと話せない。
加藤 そういう子供たちが老人になったらどうなんだろうね。

池田 今の患者さんたち見ているとね、生命力落ちてるように感ずるの。アレルギーあるでしょう。ということは防衛力が落っこっているの。だから誰かが言った四十一歳寿命説もあながち否定できないね。

児玉 食生活なんか昔と比較にならないぐらい良いんだけど、ちよつと熱があつても、ちよつと具合わるくつても直ぐ来ますでしょう。あれはねえ——。

加藤 例の「くしゃみ三回、ルル三錠」コマージュナルとしては素晴らしいけど、あれが悪人でしたねえ。

池田 あれはよくない。害毒を流したネ。大吉 生物学的な障害、疾患に対してはわれわれも努力しているし、百十五とか百五十歳とかは今ならば言えるだろうけど、これからは社会的な、例えば公害に対しての抵抗力や免疫を考えてゆかないとネ、せいぜい八十歳が限度になると思えますよ。

池田 もう五年しかないな(笑)。私はね、自分の将来は予測できないでしょう。

その点でちよつと不安があるの。ボケたら困る、ぼくはいいけれども家族に大迷惑をかけるからね。

(当人は幸せなんだ。一笑)

加藤 先生はボケないタイプだと思えますよ。もしボケたら、パチンと呆けてパチンと割れますよ。(笑)

池田 いや有難う。でも、ぼくにはわからないね。

(まわりがわかります。一笑)

*ここから、池田先生の漢方講義が始まります。オウレンゲドクトウ、カンジンニゴウトウなどのたいへん参考になるお話は、残念ながら又の機会ということにしていただいて……

池田 「気」という考えがあるんです。「気」が乱れるか、流れが弱くなると病

気になるんですね。これを強くさせ正調に戻してやると治るといふ考え……遠藤周作が、よくわかると言ってます。

沢山 お酒なんかもいいわけだ。

池田 そう、だから百薬の長。でも気が流れ過ぎると駄目。(笑)

加藤 草根木皮、果実が長生の靈薬とされたのはうなずけますよね。樹木の寿命つてのは何百年以上なんだから。あ、思

い出した、仙人になるための方法ですがね。まず房中術、それから脱穀——これは現代では肉食の制限かな、それに修業となるんだけど、そうまでして不老長寿になることもないか。

池田 仙という字はニンベンに山、だから山に棲まないと仙人になれない。ニンベンに谷だと俗人なんだよ(笑)。リッシンベンに失うは忙しいでしょう。あまり忙しい人は心を失ってるんだ。昔からわかってるんだ、忙しいのは生命を縮めるから駄目だつてことは。日本は原則社でしよう、それから——なんて言つたっけな……あ、頭ボケてきた。まあ原則社会だ。(ボケじゃない、自然ですよ。一笑)中国は違う、逆なんだ、非常に現実的でね。

三村 ボケ方にはね、裏舞台があつて、その人の人生観や人柄が反映しますね。ボケのタイプは色々ありますけど、その人の抱いてきた人生観の型が即、ボケの型になるんです。

沢山 普通にいけばそうなるんでしょでも途中でアクシデントがあると変わりませんか？たとえば、手術の麻酔なんか外から作用を受けた場合、非常に頭によ

かった人が……。

加藤 麻酔や催眠術でのなにかデータありますか。あるいは催眠治療の実験みたいなもの。

大吉 二、三日前の整形の雑誌に載ってたんですが、大腿骨頸部骨折手術後のボケが回転椅子をグルグル回していたら、二週間でボケが治ってしまったんだって、三人。そういうこともあるんですね。

加藤 ほう、理由は何でしょうね。

大吉 それがわかれば苦労しなくて済むんでしょうがね。

児玉 みんな回してみたら。(笑)

沢山 笑い事じゃないな。

たいせつな事は

大吉 いかにも老年期を楽しく過ごすか、いかにすればいいか、その方法はあるのかということネ。

加藤 高橋先生、どうですか。ボケなどは考えなくてもいい、人生これからという子供たちと毎日つき合っている先生の感想は……。

高橋 そうですすねえ、うちはオモチャをたくさん置いてあるんですがねえ。男の

子、女の子という区別はなしに、考えるものを非常に喜ぶんです。三角や四角のものを箱の中に入れてますけど、それから時計ネ、これを回すでしょう。ボロボロになっちゃうんだなあ。軸受けをしつかりさせた自動車も、すぐにガタガタですよ。大人の感覚で買って来たものはあまり喜ばない。子供の感覚は別な次元にあるんだと思いますねえ。考えることが好きなんですネ。ボケの防止という話を聞いていて、成る程なあと感じますけど。

池田 歯も大事だね。

大吉 現代人は顎が弱くなって来てる。

安立 いまの若い人の顔は、みな同じになってきてますね、細っそりとして。

池田 昔の殿様に差し上げるみたいに、ていねいに身をむしってくれるから噛むことがない。奥歯を噛み締めることも。

高橋 今の子は歯が揃って生えていないんだなあ。うちの娘も矯正してるんだけど、顎の形が細くなってるね、歯の数も幅も変ってないの。

加藤 これ一個で完全食品——いわゆる宇宙食の時代が来るんだと、年々若い人達は信じていきますよ。ポーンと一個口

に入れて、歯のいらぬ時代が将来かならずやって来ますよ、今は養殖時代だけ。そんな味気ない時代に不老不死なんて意味ないなあ。どうです、九十歳ぐらいでいい？

沢山 七十五で結構。(笑)

大吉 ぼく五十五の時に「老化と長寿」というのを書きましたね。それに「人生七十から七十五」と書いたんです。十六年前にね。これからどれ程伸びるかかわりませんが、生き甲斐のある長寿を得るためには、まあ栄養ですネ。それから運動。それからストレス解消、いかに休養を上手にとるかですネ。運動やれば即健康というわけではないんで、個人差がありますから体力・年齢に応じてやらなければネ。標準的には脈拍が一二〇以内の運動をすることですネ。

池田 ぼくたちの年齢だったら一二〇超さない方がいい。

加藤 脈拍の戻り時間。八〇まで戻るのがに何分かかるか、これ案外使えますね。

沢山 心臓には慣れがありますね。同じ距離を走っても一日目は一二〇以上、次は一二〇になって、その次は一〇〇ということがあるので、何回かやってみかけ

れば適当な運動量をつかめませんね。

三村 あのですね、いくつかの老人病院を見てますけどね、おじいちゃんほとんど亡くなって、おばあちゃんだけが残っているんですね。男は早く消えてゆく。

女性二人居らっしゃるけど、男と女の人生哲学はおのずから違うと思うんです。

加藤 一番極端なのはカマキリとサソリでしょう。婚礼の儀式が終わるやいなやオスはメスの餌になってしまふ。完璧な例ですよ、オスとメスの哲学の違い。

三村 哀れですねえ。役割を果たしたら、嫁さんの腹の中に消えてしまふ。(笑)

加藤 人間の男はネ、必死になって男性優位の歴史を作ってきた積りなんだけどそれも幻影に過ぎなかった。生物の原則は依然として厳存しているというわけ、仕方ないんだなあ。(笑)

三村 女性は現実的だし、持続的ともいえますけど、男は夢想的で短絡的です。ぼくはね、長生きすることが、その人の美学だとは思えません。いかに充実して生きるかということだと思いますね。

児玉 そう思う方が男にとっては救いになりますね。(笑)

三村 斎藤先生、なにか言ってください。

斎藤 ……そうですね、死亡広告欄な

んか見てましてね、わたしなんか子供もまだ小さいんですけど、目標は六十歳です。それまでは、まわりとも若い気持ちでやっていけると思えますんで。

安立 自分が何歳で死ぬってことがわかったら、どうでしょうねえ。

加藤 かえって、ぱっと動ける人っているんじゃないですか。

児玉 われわれはまだ健康だから、そう言えるけど、病気になるって、あと三か月だって知ったら、やはりね。

*このあと、どうしても避けて通れない死の問題について、患者への告知の微妙さ、沢山先生、安立先生の体験的な貴重なお話、さらには医療訴訟から女医論・今と昔、あらためて臨床医のあり方、大病院と開業医院の特性など

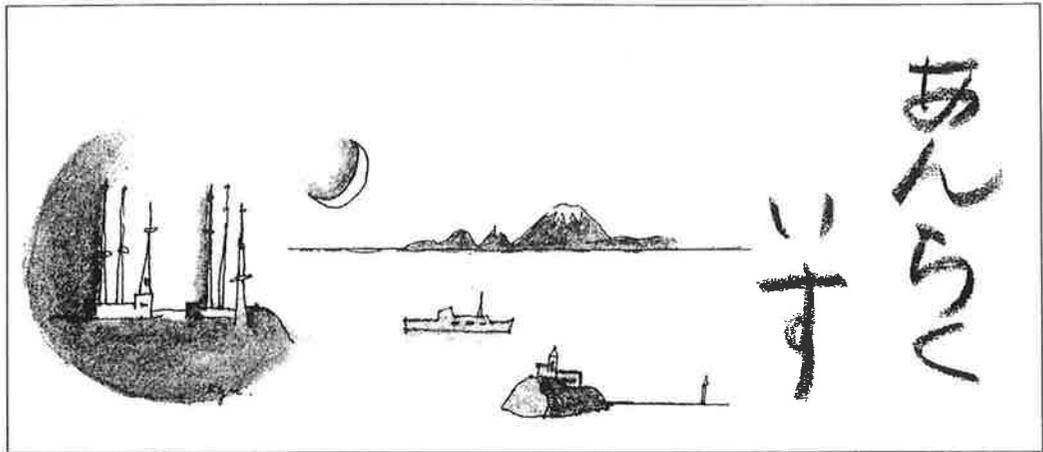
じつに多彩な談話が続きます。ご紹介できず、まことに残念の極み。

三村 ……お話の途中で心残りなんです。が予定時間も相当オーバーしましたので、毎回のしきたり通り村井先生、最後をお願いします。

村井 今日是不老不死がテーマでありませけれども、臓器移植とか、美しく老い

るにはどうするかとか、ボケへの恐怖、ガンの告知、さらには女と男の業に発展しました(笑)。不老不死への努力は、これからも続けられると思います。殊に最近ではDNAの組み替えもできるようになりましたから、最終的には脳が衰えたら脳DNA、歯が悪くなったら歯のDNAを入れて、というようなことは当然来ると思いますし、蛋白合成も近い将来だと思えます。でも、生きている限りは死というものがある、だからこそ生きていくことの意味がある。不老不死になれば、これは全く面白くない人生になるんじゃないか(そうネ)、死があるからこそ美しく生きて行こうとする意欲が湧いてくるのかも知れません(その通り)。我々の体はDNAでモザイクで出来上がっています。しかしそのモザイクを統御する原理、それは何か知りませんが存在すると思うんです。そのことをしっかりと頭に染み込ませておくことは、やはり、いいことではないかと思えます。……ということ。(拍手)

[編集委員・大久保先生はよんどころない事情で欠席されました]



不老・不死に思う

吉井正仁

(愛生病院)

親交会誌「波久鳥」編集の先生から、「不老・不死」をテーマとして座談会を企画したので参加しないか、とお誘いを受けたが、あいにくスケジュールの調整がつかないので辞退申し上げた。

考えてみると、不老といい、不死といい、私が首をつつ込んでいる謠曲の中などではよく出てくる題材ではあるが、いづれも浮世ばなれしていて、企画の目的が奈辺にあるのか考えこんでしまう。むしろ「老いる」とか「死について」とかのテーマの方が、既に老年の域に片足つつ込んだ私には実感として受け入れられるような気がする。リアル過ぎて夢がないとも云われそうだが、座談会にもし出ていたら、終ったあとで気が滅入るようなことになったのではなからうか。

死といっても「脳死か心臓死か」では今更面白くもなんともないが、「死の美学」死にざまのあり方」あるいは「楽に死ねる方法」なんかでワイワイやったら、

かなり面白いと思うのだが。

年齢をとりたくない、といって赤ん坊のままでもいいということではないだろうが、若いままでもいいといっても、どの位の若さでいいのか。先日ある会合で居合わせた連中、いずれも五十代後半の連中だが、大体四十五才位で止まればよいといった結論ともいえぬ結論であった。若い人達は何んと云うか。年代により人さまざまであろう。いずれにしても老いたくない——死にたくないということ、死ぬことなしに永遠に生きることができれば、どんなに楽しいことかと思像する。

本当に楽しいであろうか。現世において、このまま人間の寿命がもっと長くなったとしたら、果して楽しいか。毎日毎日の現実を考えてみよう。もし五百年も寿命があるとしたら、果てしないストレスが五百年も続くのである。このストレス、苦悩に耐え得るであろうか。考えただけでも気が狂うというものである。その間に文明はもっと進歩するし、人間だとして進化するからそうはならないだろうという理屈は抜きにして、矢張り人間の一生に寿命があるということが、逆に救

いになっているのかもしれない。

佛教で「輪廻転生(りんねてんせい)」という言葉がある。人間は死ぬことで一旦ひと休みして、別の顔と別の名を持って、新たな環境に生まれてくるということである。前世の記憶も死後の世界の体験も一切忘れて転生してくる。忘れてしまふのは嫌だ、忘れたくないという人生を経験した人もあろう。「君の名は」のように特別忘却を誓わなくても、忘れるようになっているのである。前世や死後の世界でのことをいちいち記憶していたら、転生した人生は大混乱になる。忘れるということはいわば宇宙の法則であり、神のご意志でもある。私などは輪廻転生のまえに既に宇宙の法則に従いつつある(?)。

死後の世界として、天国や地獄などの霊界を実在として肯定するほとんどの宗教は、形こそ異なれこの輪廻転生の法則を概念的教義として示している。人間すべて輪廻転生を繰り返しているそうだが、忘れるということが前提にあるので実感はない。実感はないが、繰り返すということは苦しみであるともいう。なんとか因果のサイクルから解脱して神の国に至

り、神の至福のもとに魂の永遠を願うのが理想とされている。

とにかく神の国に入るのも、転生してこの世にくるのも、霊界の試験に合格したからであって、転生してきた我々も一度修行するためにこの世に選ばれてきた者である。転生を繰り返す、善悪の何たるかを悟って、ようやく因果のサイクルを離れて神の国、至福の国に住むことが許される。霊界もこの世も試験試験でやりきれないが、霊界に閉じ込められたまま、転生試験に合格できない浪人も沢山いる。至高の僧の如き、また善行を積み、悟りを得た数少ない人達が因果のサイクルを離れ、至福の国に至るので、これを読んでいる貴方も、書いている私も、まだまだ苦しい転生を繰り返すはずである。

前世の因果で、天国に行くか、地獄に行くか、自分はまこと善人であり、過去現在決して悪心も悪行もないと云いきれる人はいないと思う。とすればほとんどの人は先ず地獄を体験することになる。「汝は肉体を持つていないのだから、たとえ身を切られようと恐れることはない」(チベットの死者の書)と云われても、

霊界の恐怖は夢の中で体験する恐怖以上に増幅され、夢が強いリアリティーを持つているように、霊界のそれはそれこそ身の毛がよだつ物凄いいリアリティーを持つているにちがいない。

もつとも、地獄はあの世にはない。もしあるとすれば、この世にある。という人もいる。井上靖氏が食道がんの手術をした時、手術室かICUにおいて、夢うつつの何十時間かの間で確信したに違いないことを、何度もうわ言で口に出したと家人から聞かされたそうである。本人は全く記憶していないが、このような人間断定、あるいは人生断定は、その後心の中で確固とした安定の座を占めているという。「地獄は来世にはなくて、いま生きているこの現世にある」(群像—平成二年一月号、井上靖「生きる」より)。

井上靖氏ほどの人が仰言るのだから、安心された方もあろう。

地獄がああ世にあるのか、この世にあるのか、それはそれとして、もし不老・不死が現実のものとなれば、輪廻転生もなくなり、霊界での恐怖も体験しなくすむ。しかし、死後の世界がなくなるということは、天国という概念もなくなり、

神も仏もなくなるということである。不老・不死で一時は人口も増えようが、やがて転生してくる人も種がつき、人口は安定するから食糧の心配はないかもしれない。しかし、人はやがて気が狂いはじめ、ついには世の中「気違い」であふれ返るであろう。精神科の医者がどうなるかは、はなはだ興味のあるところだが、誰も彼も皆「気違い」になった世界を想像してみよう。それは極楽の世界であり、地獄の世界でもある。井上靖氏は現世、来世という次元のもつで、地獄は現世にあると断定されたが、不老・不死の世界では極楽も地獄も現世に引越して行くことは確かだ。

「つけたし」

不老・不死なら人口は安定し、食糧の不安はないといったが、それは現世、来世という宗教的、観念的な論法を前提にしての話で、視点を変えて、自然科学的にみれば、人間も例外なく生物であり、生殖機能もある。従って赤ん坊も生まれてくる訳で、それが不老になり、不死となるとどうなるか。喜ぶどころか、極めて悲観的な結末となる。

適当な年令でストップして、しかも殺

されない限り死なないのだから、何らかの調整をしなければ、やがて地球上は人で溢れかえる。――不死というのは、殺されそうになっても死なないのか、殺されるということがないのか、その辺りのことは判らない。ともかく有限の資源というんだから、人工の資源を無尽蔵につくらねばならず、人口調整のための政策も必要であろうし、問題は次から次へと山積し、どうにもこうにもならなくなる。科学の発達で、ロボットも多くなり、世の中は益々合理化される。クローン人間生産が完成すれば、効率の悪い育児に手間暇かけるよりはと、本来の人手はどんどん減らされる。

物というものは、使っているうちにだんだん消耗してくる。しまいには役に立たなくなる。人間だって、年齢こそ若くても同じこと。消耗した人間、機能的に劣る人間は一体どうなるのか。当然の帰結として、合法的に「処理」されることになる。――このあたり「不死」というのはどうなるのか。殺されても死なない（？）となれば、事は極めて厄介である。このことについては誰か他の方に研究して貰うとして、まあ、いろいろ考えてみ

ても、矢張り現在の方がいいと思うんじゃないだろうか。

あとがき――若い時はこんな文章は書く気もなく、深く考えることもなかったと思う。年齢をとると努めて楽しいことを追うようになる。若い頃から読書は好きだから、種々読みあさったが、あくまで形而上のこととして、それに捉われることはなかった。二三の例外を除いて。しかしこのウンザリするようなことを書き散らして、ふとその世界というか、思考に引きずられ捉われている自分を発見して驚く。これも年齢のせいであろうか。

若い人とちがって、楽しさを追い求めるといつても、無責任というただし書きがつく。孫を可愛がるように。無責任ということでは、この書き散らしも例外ではない。座談会に出られなかったお詫びのつもりで、不老・不死のテーマに思ったことを書き散らしたままで、この内容についても一切責任をとるつもりはない。ウンザリするようなことを努めて楽しんで書こうと――しかし、もうやめた。この次は本当に楽しいことを無責任に書く。

東は東 西は西

(東欧紀行)

上田 智夫

(上田内科医院)

東は東

寅の与太話も、映画の寅さんシリーズと同じで引込みがつかず、又々登場してしまった。ところが、まがりなりに原稿を書き上げてやれやれと思っていたところ、テレビが突然のゴルバチョフ失脚及び復権を報道している。いずれにしても見通し不明のまま原稿に多少手を入れた。

アエロフロート

ゴールデンウィークに、少しでも安く廻ろうと言うのにピッタリのツアーがあったが、これが名古屋発着のアエロフロートのチャーター便。風の便りには聞いていたが、なる程と驚く事ばかり。ボックス・ランチ同然の毎回同じ食事に、隣をのぞき込むと、キーキが朝と同じだったり、サラダが違っていたり、食べ残しを利用したのかなと勘ぐってしまう。「ミ



クレムリン前で

ネラル・ウォーターか、ジュースか」と聞かれ、思わずムツとした寅、酒以外飲めるかとかねて聞いていた通り「有料でアルコールドリンクはないか」、「ノー」。このミネラル・ウォーターなるものがジュースと全く同じ味で二度ビックリ。昼食後コーヒーも出ず、「コーヒーは」、「ノー」

これはいかんと、帰りにはモスクワでビール、コーラを一抱え買って持込んだところ、スチュワーデスがにこにこしな

がら、「食前にシャンペンはいかがです、食事のワインは赤にしますか白にしますか」と聞かれ、狐につままれたよう一体どうなっているの。トイレは悪臭、シートは狭い、映画・ビデオはないで良い所はなかったが、チャーター便なので空席がありゆっくり坐ることが出来たが、前方の上等席はクルーが一人三席づつ独占、やっぱりお役人、寅達は乗せていただいている訳だ。

トラバント

有名な東独の国民車で、旧東独地域のほか、チェコ、ハンガリーでも沢山走っている。三百万台生産され、現在も二百万台残っているとされるが、三十四年間一回もモデルチェンジなし。プラスチックのボディ、二気筒、空冷、五百cc(オートバイでも七百五十ccのナナハンがある)、煙を吐きながらバタバタ走っている。

笑い話が沢山あるが、

「トラバントの値打を倍増する方法は」「ガソリンを満たんにすればいいよ」

つまりガソリン一杯と、トラバントは同じ値打しかないと言うこと。このトラバントが、高校卒業時に申し込んでも、

本人が結婚してその子供が小学校に入学する時に、やっと入手出来たとか。

スーヴニール

何でも有名品を商売にする気質は東も西も同じと見え、既に観光用として数百米しか残していないベルリンの壁は目玉商品。「ブランデンブルグ門」「ウンター・デン・リンデン」いたるところ、壁グッズ。置物、キーホルダー、写真パネル等、商魂たくましいが、さすがに壁まんじゅう、壁ヨーカンのたぐいはないな。

もう一つ驚くのが、ロシア軍、ワルシヤワ条約軍の服装類。帽子、制服、階級章、勲章、刀剣等数限りなく売られている。何か御維新で落魄した旗本が、御家伝来の品物売り喰いしている感じ。聞くところによると、東独はじめ各地のロシア駐留軍は、引揚げは決まっているものの、帰るべき兵舎もなければ、軍隊をやめても職はなく、更に引揚げの費用すらなくゴロゴロしているとか。

追記。今回の政変で、東独だけで三十万人と言われる、言うなれば敗残兵が、自暴自棄になって暴走しなければよいが。

ベルリン・ポツダム

ベルリンでは、ペルガモン博物館が、



ペルガモン博物館

今回の目的の一つ。医業の神、アスクレピオスを祭る祭壇、記念病棟の残るトルコのペルガモンには遺品は殆どなくドイツはトルコの国内建設費と相殺したと言訳はするが、掠奪同然でベルリンに旧遺品がほとんどあり、その他アッシリア、バビロニア、ペルシャ等の遺品も多く、中でもネブカトネザールのイシュタル門（コピー）は、歴史、美術の教科書には必ず出て来る。最近では、英・独・仏語のほか、日本語のカセット解説があつて、イヤホンで聞きながら一人歩きで充分わかる。

ポツダム宣言で有名なツエッペーリエンホフ宮殿（発音しにくいなあ）は、こじんまりしているが、米・英・ソの三国首脳が坐った席を見ていると、日本の戦後を含めた世界の動きとかがわりを感じ

る。

同地でやはり有名なサンクスーシ宮（無憂宮）は、フリードリヒⅡ世のフランスかぶれが鼻につき、ベルサイユ風のコピーで感心しない。殊に支那茶館は、中国人とも日本人とも国籍不明のケバケバしい立像が、十八世紀の西欧の東洋人観を垣間見る思いで、あまり気色良いものではない。

ドレスデン

戦時中の大空襲で市街の八十五%が破壊つくされたが、戦後四十五年以上に亘って、そして現在も煉瓦一枚づつ積み上げて歴史的建造物を修復しているのは、国民性の違いとはいいいながら頭が下がる。ゼンパーオペラで観劇の予定であったが、日程とチケットの入手の関係で断念。ホテルは中央駅のすぐ前で、ネバホテル。レストラン、ティールームの名前も、「レニングラード」「プーシユキン」等如何にも東に來ている感じがする。東欧各国がそうであるが、自由経済が思う様に機能していない中で、唯一西欧を真似して成功した（？）と言われている、世界最古の職業のお嬢さん達がたむろしているが、これがスタイル抜群、ミニスカ抜群、



カレル橋で魔女と

中でもチエコは素晴らしかったなあ。マイセンはお店は休日、やれやれよかったなあ見るだけタグよ。

ブラハ、カルロビバリ

時あたかもブラハの春、うきうきしている、かつての名花チャフラスカに一寸似た（様な気もする）ガイド嬢、「ブラハ中央駅は危険で、引つたり、強盗などが出るので近付かない様に」と釘をさされる。

丁度何かのお祭りらしく、三百四十年

の歴史を持つカレル橋は人々でゴツタがえし。聞けば魔女の祭りとか、可愛い魔女や魔術師、音楽隊に混って一緒に橋を渡る。橋の下の広場ではブランケット一枚で仕切った青空舞台でドタバタ劇をやっているが、橋の上からは衣裳替えやメイクが丸見え。戦前の日本の地方のお祭りの、大道芸人達を見ている様でほほえましい。

市庁舎広場では、これも有名な天文時計があつて六百年近く時を刻んでいるが、デザイン的にも近代感覚でありカラクリも見事である。それにもまして寅には、マルチン・ルターより早く宗教改革を唱え、異端者として処刑されたヤン・フスの記念像に心ひかれた。このほか、プラハ城、かつての錬金術師達の住まいである黄金小路、ユダヤ人地区（ゲット）、ユダヤ教会（シナゴグ）等見るべき所も多く歴史を感じさせる街ではある。夜は「ウ・フレクー」でビール、これも創設一四九九年との事でビックリ、更に黒生ビールがジョッキ一杯約百円で二度ビックリ。

温泉地「カルロビバリ」（ドイツ名カルルスバード）は、登別のカルルス温



ウ・フレクーにて

泉の名称がこの地に因んでつけられたと言う風情のある場所だが、売っている薬草混じりの地酒を「日本の養命酒」だと説明され思わず苦笑する。

二日目の夜は陽気なイタさんと一緒に民族酒場で飲み、踊り、大騒ぎして、夜行列車でウィーンへ。

ブタペスト

途中のウィーンでは、JALプラザでのオペラチケットの購入など色々あったが、前回書いたので省略。ウィーン、ブ

タバストの間は水中翼船でドナウ下り。ライン下りと同じでブタバスト近くのドナウベント地帯以外には余り見るべき所はないが、兩岸に殆ど人工の手が加えられず、或いは草地、或いは土の露出のままなのは、流れがゆるやかなせいもあるが羨ましい気がする。それでも、ブタバストに近ざると、「くさり橋」を中心に多くの素晴らしい橋、古城、街のたざずまいなど、さすがに「ドナウの女王」の名に恥じぬ素晴らしいさである。

ブタ地区では、ステンドグラスが見事なマーチャーシ教会、漁夫の塔などが見所だが、近くにあるハンガリー民芸品の刺しゅうは結構な値段である。これは郊外のセントアンドレでも同じで、ヘレンド陶器は見るだけで結構、一般に値段が高いのはウイーンから日帰りでも行けるせい。郊外には、ローマ遺跡、トルコ風呂の跡などもある。

ペスト地区の国会議事堂は、尖塔などの一部シルエットを除けば、スケール、形、ドナウ川に臨んだ風情といい、ロンドン国会議事堂と良く似ている。イシュトバン大聖堂は此国の初代国王の記念聖堂で、マーチャーシ教会やその他の場所

でも記念像を見る事が出来、ハンガリー人の尊敬の的なのがわかる。また、ハンガリーも温泉の多い所で、準備の良い人達はバスツアーで移動の僅かの時間を利用して温泉に入ってきて来た。

昼も夜もブタバスト最高の眺めと言えるゲツレールト山の、チッタデラ（城砦）のレストランでお別れのパーティー。丁度寅の誕生日で、バースデーケーキを出され感激。折から片側ドイツ人、片側日



チッタデラでドイツ人と

本人で、口々にお祝を言われ菩提樹、ローレイ、野ばら等の歌でさようなら。

モスクワ

モスクワでは航空便の関係で突然時間があり、モスクワ市内見学募集となり、赤の広場、クレムリンへ。

あわただしかったが良い思い出になり、テレビを見ていると記念写真をとったあたりを戦車が走り廻っている。

モスクワ空港は大変貌、品揃え豊富な免税店が二軒あり、他にもアイスクリーム店、ファーストフード店、驚く事にスロツトル・マシシまで置いてあり、お上りさんよろしく日本食レストランで、「ざるそば」を食べた。モスクワのざるそばの味は御想像にまかせます。

今回も酒の話が出なかったが、ビールは各地とも非常においしかったし、ワインも中々のもの。ハンガリーで、トカイワインを空港待合室で買おうとした所、中の免税店の方が安いと言われ、搭乗待合室に入ってみると免税店は休み。東にはこれがあるなあ。

いずれにしてもソ連の将来の状況がハッキリしない現在、貴重な経験をしたと思っている。

好きな言葉

心に残る言葉や文章

中村 秀

(中村小児科内科医院)

見たり聞いたり、又、本を読んでゆく内に、色々な言葉や、文章に出會う。その中にああ良い言葉だなあと思い、又何とはなしに何時までも心に残る言葉や、文章に出會うことがある。

中學時代であつた。一年生か二年生の頃だつたと思うが、一年以上級のある優秀な生徒が學内の辯論大會で「脚下照顧」と題して雄辯をふるつた。彼は確か優勝した。その内容もさること乍ら、その題名が未だに心に残っており好きな言葉である。これは後に禪宗の大切な教えと知つた。

又、時折眼につくものに漢文調のものがある。「春風を以つて人に接し、秋霜を以つて自肅む」「温故知新」「眼光紙

背に徹す」など。こんな気持ちで人に接し、勉強をしたならば、もつとましな人間になつていただらうなどと考える。

「三つ子の魂」と言う言葉がある。これは二才から二才半頃にかけて自我のめばえ始める頃で、何かと大人に反抗を示す、第一反抗期に一致している。ただ徒らに大人が深く考えずに、禁止を以つて抑圧してはいけないことである。これは人間形成上も大切なことである。先日朝のテレビで、デカルトの「我思う、故に我有り」の言葉が耳に入った。「三つ子の魂」と思ひ合せて何か心に感ずるものがあった。

神學者ラインホルド・ニーバーの言葉と云うべきか、教えと云うべきか次の文章がある。「神よ我らに与え給え、変えるべきときには、それを變える勇氣を。變えることの出来ないものについては、それを受け入れる冷静を。そして變えるべきことと、變えることの出来ないこととはつきり見分ける英知を。」母乳哺育研究の第一人者であると同時に又その提唱者でもある山内逸郎博士が感動的な言葉であると述べているが、誠に心に残る教えの言葉である。

好きな言葉に夏目漱石の造語と云われている「則天去私」がある。このことについては以前に書いたこともあり、今は多くを述べないが、ただ小林芳人先生もこの「則天去私」を御自身の座右の銘にしていると言われているが、この言葉の意味は云う迄もなく、自然に従つて私心を去ると云うことで、これは全ての學問にも芸術にも普遍的にあてはまるよい言葉であると書かれていた。更に深い意味は分らないが、好きな言葉である。

私が富士鉄病院在職中に当時の所長さんであつた佐山励一先生に頂いた一枚の色紙がある。有名な阿部能成先生の書であり、紙面には次の如く書かれている。「山間明月高湖上清風多」然別湖所見能成。時折書齋にこれを掲げて、然別湖の涼風を静かに味わつてゐる。



北海道ドクターズゴルフ 大会に参加して

安藤修一

(本庄医院)

第二十五回北海道ドクターズゴルフ大会は、平成三年六月三十日旭川市医師会主催で、大雪山カントリークラブにて参加者約百七十名で開催された。室蘭市医師会ゴルフクラブより九名申し込み八名参加した。

六月二十九日午後七時より、A1クラブにて前夜祭があり、美人ホステス・飲み物は結構だったが、食べ物が少ないとの評判であった。殆どの方がパレスホテルに宿泊する。翌早朝までトリンケンした先生も、二、三名おられたようだ。

六月三十日午前六時バスにてホテル出発、遅くスタートの先生方はハイヤーで出発することになっていた。午前七時奈良旭川市・斎藤室蘭市の両医師会長、道

医役員等の始球式にて開幕する。日頃の實力を發揮するには大変よい天気で、コースの状態も良好、何等の言い訳も出来ない条件で、各地の先生方と室蘭市医師会の各メンバーも、それぞれの時間にスタートしたはず……と思ったが。

K先生、東京での暑い中、ハードな学会を三日間で終え、最終直行便にて旭川に到着する。勉強からの開放感もあつてか痛飲する。気分よく酔いが廻り、衛星放送のウインブルドンなどを見ながらベッドに入る。いつもの通り一度目が覚めたが、又ウトウトとねた。ハアツとして目が覚めたら、衛星放送では八時のニュースをしているではないか、日頃落着いている先生もさすがに慌てる。スタート時間にはもう間にあわず、ゴルフ道具一式は送ってあるしと思案……もうこうなったらと腹をすえ、一応ゴルフ場まで行くことに決めた。個人タクシーを頼み、運転手の配慮で平均時速八十キロで飛ばし、約二十分程でゴルフ場に着く。最終パーティーもスタートして数ホールを終わっているようだ。旭川市医師会・ゴルフ場の役員の好意により、特別参加と決まり、大急ぎで用意し、カートに乗せても

らう。各ホールのティーショットが終るのを待ち、その間を「一寸失礼します」と、通り抜けること数ホール。本人はカートに乗せてもらっているものの、大変バツの悪いものであったと。7ホール目より参加することになった。前半終りの3ホール夢中で経過、後半9ホールは、他の先生方の足を引っ張らないようにと、やや緊張ぎみにプレーしたのが良かったのかパープレー、結構楽しかったようだ。成績一覧表には載らず、かくして「幻のプレーヤー」となる。これは後日知ったのであるが、M先生、前日より張り切つて旭川に乗り込み、軽く1ラウンドを終えた。久し振りに旧友と会い、普段あまり飲まれないそうですが……つい鯨飲をしてしまったが、明日のためにとベッドインするまではよかつたが、翌朝、熟睡と二日酔のためか、スタート時間になつても目が覚めず。不参加となる。熟睡と二日酔のため、結局壮年組・室蘭市医師会ゴルフクラブの期待の星もついにダウンする。かくして頭書の九名申し込み中八名の参加となった。

また、私は、白鳥コースでいつも林の中にいるためか、ドライバーを林の中

にばかり打ち込んでいた。数ホール過ぎた折り返しのコースで、向こうから見慣れた先生が林の方に来るではないか、畠山先生だ、先生もドライバーを曲げているのではないか、又インに入ってからも土手下から打っていたのが見えた。柄にもなく心配していたが、ホールアウトしてみると、40・38のパープレー。畠山先生曰く「先生とあった二つのホールともパーでしたよ。」と、木を越したり、土手下からよくパーがとれたものだ、さすがMGCのシングルと感心させられた。競技は正午頃終了した。

成績は青年A組畠山先生六位、青年B組齋藤医師会長十位にそれぞれ入賞。八名参加中二名入賞は、なかなかの成績であった。他の先生方も一十オーバー。私だけが、61・44で、ハーフ60以上だった者は百七十名参加中私一人であった。懇親会・表彰式は約百五十名参加、松花堂弁当・生ビール・つまみ・くだものと御馳走をいただき、増田大会運営委員長は「地元より優勝者を出さないようにと考えていたがだいたいその通りになった。」と話されていた。表彰は壮年・青年各A・B組の四組、奈良旭川市医師会長の挨拶、次回主催地の齋藤医師会長の招聘挨拶があり、二時頃終了する。

帰路車中では、八名2ボックスを占め、ビールのみ、反省会、来年度ドクターズ大会のことを話す。少々アルコールのまわった遠藤ゴルフクラブ委員長曰く「来年度のドクターズ大会は、地方の先生方に優勝してもらい、MGCのドクターが優勝したら除名する。」との熱の入れようです。第二十六回北海道ドクターズゴルフ大会を成功させるため、会員皆様の御指導・御協力を紙面をおかりし、お願い申し上げます。

親交会旅行観光随筆

塩澤 英光

(東室蘭医院)

道大学植物園↓さけ博物館↓金大亭↓ゴルフ組と合流し帰路への概略です。

あいにくの曇り空をおしての出発。支笏湖は霧の中で見えませんでした。芸術の森に着くころには晴れ間が見られました。

いかめしい石の門の奥にオブジェの立ち並ぶ芸術の森がありました。入口前の表札の前で記念写真を撮り入場。来たことのある先生方は順路と逆、あるいは近道、一度も来たことのない私は地図の順路どおり見て歩きました。全行程を四十五分で歩くのはなかなか大変でした。

歩きながらの作品鑑賞ですが、「空地の軌跡」は、鉄(ステンレス)が上下に波うった形で、周囲の林とマッチして目立っていたと思います。「浮かぶ彫刻」は、本来重いものが浮いているかのような錯覚に落ちいらせてくれる楽しい作品です。「昇」は、他の人は、鳥が飛び立つような像とのことですが、私には、ゴム動力の飛行機が旋回しながら上昇していく様な感じと思われました。

「野外美術館のシンボルリーフ」は、「札幌芸術の森」の字に蔦が絡まったように、グチャグチャとなった金属オブジ

旅行の行程は、支笏湖↓芸術の森↓ホテル(ロテル・ド・ロテル)↓かに家(かに将軍となり)↓ホテル(宿泊)↓北海



エで、石組の壁によく似合っていました。「そりのあるかたち」石とステンレスでそりを表現してあるものですが、やわらかさを表現するまでにはいたっていませんかと思われまます。「ふたり」は、二人の人物が、別々の方向を向いて坐っている像で、集団の中の孤独を感じさせられました。「雲の牧場」は、機械じかけのヨットの帆そのもので、どこが雲の牧場なのか理解出来ませんでした。「ウイグ」は、髪飾りのな名前ですが、力強い

オレンジ色で、断面は目の形、前から見ると凹形で、髪又は角を感じさせられ、髪であれば虚栄、角であれば戦いのあと。北海道で言うとする、エゾシカのオス同士の戦いで折れた角？。

「池の反映」や、「目の城90」、「ダイナモ」は、私には理解不能。「ベエが行く」はユーモラスさ。「のどちんことはなのあな」は、鼻の穴をのぞくとまたのどちんこと左は左の鼻の穴、右は右の鼻の穴が見え、上からのぞくと、それらが立体的な配置になっているというものでした。「1・9・8・5知性沈下」どこを向いても自分が映るというが、自分は知性ではないらしい。「幼いきりん」は、めずらしく素直な像そのままで、ういういしきを感じさせられる作品。「女・夏」は、夏服の女が風にふかれています。ポリュウム感たっぷり像でした。「少年の像」は、今は少なくなつた素直で素朴な少年の像。「冬の像」は、ケープ（オーバー？）をまとつた女性の立像。「足をなげる女」は、草原で足をなげだして空をおおぎ見る少女の像。「顔」は、北の風雪に耐えたたくましい女性の像。「浮游」は、天女の像の抽象化したもの。

「風の中の道化」は、肥満体のピエロの服が風にたなびいている像ですが、あまりに服のたなびきが多すぎて道化師の悲哀ささえ表わしていました。「道標」けものを背負う男」のけものとは小馬のことで、首をもたげているので生きている。それを背負う男はどう見てもたくまじさに欠け、名前負け。「北斗まんだら」は、北斗星の形にならんだ石を林が囲んでいるだけで、まんだらの名前からは期待はずれ。「位相」は、金属精密仕上げの三角錐と直線を立体的に連続させた像。「花まい」は、のびやかな女性の像でも顔は不景気な北海道人の顔。「北の大地の詩」は、馬と一緒に坐っている女性が、一緒に空を見ている像で、なるほどと思わせられる。「風と舞う日」は、ダンスする二人の女子であり、躍動感に溢れている像ですが、全体サビだらけ。「コタンクルカマイの詩」は、ポロト湖のアイヌ民族資料館を見たことのある人には、力不足。「夏引」は、大きな牛の頭で、夏の牧場に引き出される所であろう。「SAPPORO'90」や「ひとNo.16—I」は、作者の自己満足で、私の理解力を越えていました。「椅子になつて休もう」は、

人が後ろの人の曲がった膝の上に坐り相つながつた状態の円周の三分の一の像で、良く考えれば、觀賞する人への参加の誘いと考えられますが、悪く考えると予算不足。「ウレシクテ アノヨト コノヨヲ イキキスル」と「石翔ぶ」は、意味は感じられるが、いささか無理と考えさせられる。「島になった日」は、私の理解不能。「月下」は、二匹の鼻であるが、一匹の鼻は横になっていた。はたして鼻は横に寝るだろうか?。「人物1000」は、ボーと立った、黒人様の顔の金属像。「ダイナモ」発電機と考え、エネルギーシユなものを期待すると理解できない。「ポートランディア」は、海の神・ネプチューン風。「木の枝をすべりぬける少女」は、どちらかという枝のトンネルの間を少女がぐり抜ける像であるが、抜けたあとどうなるかは、考えてない像。「腰に手をあてて立つ男」は、その名前のとおりで、訴えかけるものがない。「男と女」は、男が女に慰められているように抱き合つた像で、現代の男の力のなさを感じさせられ嫌な気がしました。「トライアングル」は、三人の人間が三角形を形づくっている像。

その他の像、あるいはオブジェが森（人工に近い）の中に点在する公園で、都会の人は、ここに来て心なごむのであろうか?。それとも芸術とは何なのかを考えさせられるのであろうか? と考えさせられた。お金のかかった野外美術館であった。案外この野外というのが北海道らしい所かもしれない、秋や冬に来れば、また別の気持ちになれるかもしれないが、あきらかに異物であり、北海道の自然に対する不自然さをあえて感じさせられたのは私だけではないと思います。都会では通用しても、地方では通用しないものもあるのではないかと思います。興味のある方は一見の価値ありと考えさせられました。

その他「走向世界」「母と子」「関係項」「人物」「波の重なり」「ミロク'89-1」「シャフトII」「彩霞燈」「間」「石緑」「異・空間」「道標・鴉」「開拓の祈り」「マイスカイホール85-7」「オーガンNo.10」「方円の啓示」「道」など多彩。

芸術の森の人工池には、オタマジヤクシヤイモリ（あるいはサンショウウオ）の子が泳いでいましたが、像ばかり見て

いると見のがしてしまふと思われるもので、自然のものではなく、職員が地方で捕獲したものを放し飼いにしているようで、今後の成育に期待したいと思われました。

再び集合してホテルへ、「LHOTEL」DE「LHOTEL」と書いて、ホテル・ド・ロテルと読むのだそうです。ようするにフランス風に1FがなくLB↓2Fとなりますが、1F・2Fは喫茶店・服屋・アクセサリー店があり、3F以上がホテルという都市型ホテルで、たぬき小路に近く、飲食店街の近くに隣接しているわりには室は標準の広さ、さすがに地価の影響かロビーやエレベーターは狭目、家具は今風で、タイマー付のヘアードライヤーがあつたのには注目。最近個人で土・日の札幌のホテル宿泊予約は不可能に近く、JTBさんでも一年前からの予約とのことでした。

「かに家」はかに將軍の隣りに最近出来たきれいな内装を持つ料理屋で、カニが生でさしみで出たり、カニと山イモ（長イモ）のコントラスト、旭川の地酒（冷酒）がユニークでしたが、カニの塩ゆえなど素朴さがなく、カニの量も少なかつ

たため意外と不評。ススキノの飲み屋街の一夜の収入は約六億円とのことで、札幌も段々東京化し、うまいものが食べれば、金を出せの世界になりつつあり、大変なげかわしいかぎりであります。

他の先生方は二次会へ、私は早々にホテルにて休憩。朝は8Fのレストランへ。壁には古いフランスのビールのポスターが大きくはつてありましたが、洋風朝食はワンパターンで、フレンチサラダはなし、イチゴジャムの容器とバターは大きかったのですが、今はやりの減塩バターで、あまり北海道を感じさせられませんでした。

九時にはバスで北大植物園へ出発。観光組は十名で、内、曽根先生は、スベイン絵画展・道展へいらつしやつたので実質九名、曇り々晴のちょうど良い天候にめぐまれました。入口の近くの北方民族資料館には、種々のめずらしいアイヌ時代又は開拓時代の生活用品が並べられていました。展示室は2Fの一室のみ。中でもめずらしかったのが、鳥皮衣（カモ皮の服）・えぞ鹿の麋の糸・トドの皮の長靴・サケの皮の靴や小物入・ホタテ貝の油燈・木皮で作られた鍋や柄杓等。自

然のものを工夫して生活に生かしていた昔と、使いすて時代の今を考えさせられました。そして今も変わらないものとして、もり・かんじき・祭事物（奉・酒ばし・杯等）も展示されています。

緑がいつせいにふいた北海道の夏の大きな蔭や木。湿地帯の温室は整備されており、涼しい朝の風の中、都会の中で北海道そのものの中に居るよう感じました。道端の立札には、「カラスがいます。通行には注意して下さい。」と書かれており、子育ての季節を感じ、空の鳥小屋に時代の流れを感じました。

ジョンパチエラー博士記念館は、あいにく改修工事のため平成3年5月より当分の間休館とのことでした。にしん舟は、磯舟の約一・五倍の大きさの実物で屋外に置いてあるため変色していました。

バラ園では、今を盛りと開花した種々のバラが競い合っており、いつも見なれた草本分科園には、青色の山ブドウがなっていました。順路の道端の大きな木の幹の傷は、コンクリートで硬められ、草木にくわしくない私でも若干のさびしさを感じさせられました。高山植物が日本庭園風にアレンジされた園や、植木ばち

ならぬ植草岩の展示場は、盆栽趣味に近いもので、所狭しと並べられていました。園内には、若い男女や老夫婦、外人等種々な人達が散策していました。通路は、半分以上緑の葉の影であり、暑くもなく寒くもなく天気もどうやらもちこたえ、丁度いい朝の散歩となりました。

植物園をあとに、一路さけ科学館へ。途中の豊平川の川沿いのガードレールには、さけの飾りがつき「カムバックサーモン運動」の一環だそうである。藻岩山の仏舍利塔（道内では札幌・千歳・函館の三カ所にあるそうです）をながめながら南下。中学校グラウンドでは、三里・伏古・苗穂のサッカー試合。真駒内オーブンスタジアムではテニススクール。真駒内体育館の横の「五輪橋」を渡った所では、近くの幼稚園の運動会が行われており、短い夏をいち早く楽しむという人でいっぱい。おかげでさけ博物館の駐車場は満杯。それに団体客用のバスの列。帰りの乗車は方向転換出来なかつたバスのため、五輪橋手前のもと来た道まで歩きたくなりました。

札幌市豊平川さけ科学館は、どう見ても鼻ぐらいにしか見えない建物の中で、

職員が小学生相手にさけ科魚類（サケ属、ニジマス属、イトウ属、イワナ属他）の形の特徴や公海での回避路、ジャンプ力（さけ1m、サクラマス（ヤマメ）2m等）、泳ぐ速さ（カレイ時速1km、ウナギ時速4km、ニシン・ニジマス時速6km、カツオ時速25km、さけ時速45km、マグロ時速90km、メカジキ時速百三十km等）、シロザケの一生、オス・メスの違い等について熱弁をふるっており、ホルマリンづけの標本から模型、グラフ・地図・放流と捕獲数の事業成績表からなる展示ホールと採卵ふ化室・飼育展示室・大型水槽での地下観察室・屋外観察池・さかな体験室等多彩で、その他さけにちなんだ小品の売店や図書コーナーもあり、興味のある方はぜひ一度お越し下さい。

次は、昼食場所へと、札幌市を南から北へと縦断し石狩町へ、創成川沿いにポプラ並木と釣人が多数、道場橋で発寒川沿いの街路燈の横樺の部分には、鳥よけのくぎがずらりと並んで海の近いことを示していました。茨戸川をこえ農村地帯へ、車道は逆に三車線の太い近代的道路へ、真新しいつり橋風の橋を越え、ノボ

・ノルデイスク社や石狩生コンクリート等の工場地帯へ。石狩湾浄化センター、札幌コロナ物流センター、ヤマハマリンストアにはモーターボート多数が展示され、道端の露店ではゆでたとうきびやすいか屋と変化、風が強いらしく防風壁（おりたたみ式）多し、（室蘭で言えば、黄金あたりの様）石狩町に入ると、さけ科学館に負けないくらいさけの看板がいたる所に見うけられる。

石狩海水浴場の看板を左へ、浄土真宗寺を右へ、砂丘のすぐ近くに、創業明治十三年、（建物は百三十年たっているそうな）の「金大亭」へ。創業当時は砂丘に漁師の家が二〜三軒しかなかったらしいの古い鮭鱒料理専門料亭で、瓦屋根を持った門をくぐると日本庭園風の石畳、廊下も黒光りした重厚な木造りで、ギシギシという音を立て、便所からの眺めも日本庭園で、よき古し（ふる）の家づくり、一同大満足の御様子、つい古しを思い出し、東先生は小学生の頃、石狩川河口の地引き網（サケ漁）を見、川の交通機関に川蒸気船が一日二便あったことを話され、上田（智）先生は、古し茨戸川を渡し舟でわたったもので、今は大きな橋が河口

近くに二つもあり大変変わったと述べられました。

料理は、石狩鍋（味噌と生姜味）・焼鮭・生筋子・ともあえ・寒塩引・磯の香・メフンの塩辛・酒粕の三平汁・るいべ・氷頭のなます（サケの頭の軟骨の酢の物）等が出ましたが、季節によっては、焼白子・白子のみそ汁・白子のカン口煮・きもの塩焼・鮭のいずし・石狩味等も出るそう、機会があればぜひもう一度来てみたいと思いました。

店内には、渡辺美智雄元政調会長の色紙やキリン・サッポロビールの古いポスター（美人画）、展示棚には、古しの煙管・手回し式蓄音機・番傘・ライカのカメラ・高さ三十〜四十cmはある御雛様・簪・天秤・枕・三味線・鼓・大正or明治時代のラジオ・明治時代のテニスラケット・水筒・ランプ・皮バック・花加留多憲法・尺八・浮き・陶器・扇子・板かまぼこの形の湯タンポ・手桶・駆虫剤散布機・長靴スキー・姿鏡・とっくり・時代ごとの金大亭の絆纏・古しの石狩の地図や写真・取っ手付坐り雪そり等が展示され、展示物でない厨房のイスさえも、古しの市立病院時代の私の父の診察イスを

思いおこさせる年代物で、便所の樟脳の香りや窓枠の外の板べい・板の天井・つり下げ電燈・年季の入ったすのこ等すべてが、良き古しを思い起こさせてくれ、帰る時になって米沢先生など特に帰りたくない御様子でした。別に金大亭が良いのではなく、繁栄をほこった古しの室蘭や開業医の黄金時代、自然の多かった子供の頃、そうお金はなくとも世の中が、そしてすべてのものが光って見えた自分が若かった頃の時代に、ほんの一瞬でも、もどしてくれる何かを金大亭は持っていたと、私でさえ思われ、いつまでもそこに居たいと思わなかったと言ったら、うそであろうと思いました。

なごりつきない金大亭をあとに、ゴルフ組との合流のため、石狩ゴルフ倶楽部へ、今建築中のホテル(?)の隣りのレストランハウスへ、良く日焼けし、おつかれになった御様子の面々、帰りは寝ている方々も多く、静かに帰路につきました。高速道路(実際は時速八十kmの限定速度道路)のおかげで室蘭には午後五時頃までには着くことが出来ました。

最後に、石狩町などという、奇抜な旅行アイデアを出され、不運にも同行出

来なかった大岩先生に心より感謝を申し上げたいと思います。

室蘭市医師親交会

ゴルフコンペ

(於 石狩高岡コース)

鴨井清貴

(鴨井外科病院)

平成三年七月七日、午前七時半、石狩地方の天候は曇。斎藤修弥会長を先頭に、総勢十四名による恒例の親交会ゴルフ(馬券付)が開催された。ハプニングの為、到着がギリギリとなり、前夜の酔いがさめやらぬまま各馬スタートとなった。

インスタートの畠山、三村、斎藤(修)河合組は、強風とうねりくねった難コースにもかかわらず、畠山リーダーのもとコンスタントなゴルフを展開し、ハーフを終わって全員+3以内につけた。そして、「この組から優勝がでるのでは?」という期待を胸に、陽差しの照り始めたアウトコースへと向かっていった。結果は、水平スコアー三名と実に安定したゴルフであった。唯一人アウト-3の斎藤会長は

三位、他の三名も畠山氏ベスグロ、三村氏準優勝、河合氏六位と全員入賞を成し遂げた。

その次をプレーした皆川、斎藤(光)、鴨井(貴)組の中では、皆川氏が二日酔いに苦しみながらも、果敢に難コースに挑戦する姿は痛々しくも雄々しいものがあった。アウトで木の階段にのってしまつた一打が無ければ、もつと上位に食い込めたと思われたが、五位入賞は立派の一言に尽きる。斎藤(光)氏は、小生―鴨井(貴)―がスタートからOBをはなち、御迷惑をかけた影響か、楽しみながらゴルフを展開しながらも一歩入賞に届かなかった。小生、次回は、OBを出さぬよう反省をしている次第です。

さて、アウトスタートの児玉、熊谷、森田組はハーフを終わって児玉、森田の両氏が+1、+5と優勝をねらう勢いだつた様です。このうち、森田氏はインの難コースで+5をたたき、入賞を逸しましたが、児玉氏とともに+1、+3で四位入賞は全く立派の一言です。一方、熊谷氏はアウト+4とやや出遅れましたが、イン+2ともち直し、もう一歩で入賞という頑張りでした。

最後の組は、西島、神島、鴨井（成）、村井の四氏でしたが、当初の噂どおり、西島氏がアウト-3で回り、インでもパーでまとめ、楽々優勝を獲得したのであります。前夜のパートナーがもつとお酒を飲ませておけば・・・と考えたのは私だけででしょうか。鴨井（成）氏はアウト+3と入賞圏内でしたが、難コースのインで+5をたたき、一步で入賞を逃がし、小生の馬券もただの紙となりました。神島、村井両氏はアウト+7と小生同様大荒れのハーフでしたが、難コースのインで共にスコアーを縮められたのは、やはり歴戦の底力がものをいったものと思われまます。さらに、村井氏がブービー賞を獲得したのは、前日の酒量をひかえ、加えて沈着冷静なるゲーム運びをした賜ものと想像します。

以上、十四名によるゴルフ奮戦記をかきました。レベルの高さに感心させられたと共に、今後さらに、心技体を磨いてまた挑戦すべく、心新たに、帰路のバスの中でビールを飲み干した事をかき添えて、終筆させていただきます。

連勝複式投票枠順

6			5				4		3		2		1	枠番
14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	人番
		△		△	▲					○		△	◎	予想三井
鴨井清成	森田益聿	鴨井清貴	神島茂夫	村井玄乙	児玉直彦	三村博通	河合誠朗	熊谷弘夫	斎藤修弥	西島 毅	斎藤光史	畠山正照	皆川芳徳	競技者名
30	32	36	24	32	13	16	29	20	19	18	19	6	9	ハンデイ
65	60	38	57	63	60	49	40	63	52	44	47	46	48	年齢
寸評														
<p>前日の酒量により影響されようです。絶対調です。バクテ次第です。</p> <p>絶対調です。ショット及びパター・ショートゲームにもゆえがあります。一番心配なことは酒、前日の酒量です。</p> <p>期待されるゴルフです。ハンデイ以上の実力を持っています。やはり酒量と行いに影響されるでしょう。今年最も伸びた方です。女性をいつも包む手の柔らかなさに原因があるようにです。</p> <p>会長にやらせて忙しくなってしまうのは、心配してはいます。自己のハンデイは守るでしょう。</p> <p>前日の酒量が多影響されます。グレイホースの期待を裏切らないでしょう。</p> <p>若さと勇力の先生です。ゴルフ歴は上り気流に乗っています。やはり前日の酒量と行いが影響されます。当日は誕生日なので頑張るでしょう。</p> <p>O・B必ず一つ出します。ムラ気にも問題あり。</p> <p>運指を迎えてはつらつとしたプレイが光ります。安定しております。</p> <p>前日の酒量は心配しなくて良さそうです。内に秘めた開志の度合いが問題となります。</p> <p>いよいよ銀の輝きゴルフです。やはり前日の酒量と行いが問題となります。</p> <p>新進気鋭のゴルフです。ショットも良く、これから有望な方です。</p> <p>黙々とゴルフをなされます。ショットゲームにゆえを持っておられます。やはりタークホース的存在です。いつまでも諦めない熱心なプレイをなさる方です。そのプレイへの誠実さは人柄そのものです。</p>														

最終オッズ ()内投票数

1-2	13.6倍 (7)	2-3	9.0倍 (10)	3-3	11.2倍 (8)
3	7.4倍 (12)	4	30.2倍 (3)	4	18.2倍 (5)
4	30.2倍 (3)	5	22.6倍 (4)	5	5.2倍 (17)
5	22.6倍 (4)	6	91.0倍 (1)	6	22.6倍 (4)
6	45.4倍 (2)			4-4	91.0倍 (1)
		5-5	30.2倍 (3)	5	45.4倍 (2)
6-6	45.4倍 (2)	6	45.4倍 (2)	6	91.0倍 (1)

レース結果 (2着同着)

3-4 9.0倍 (5)
3-5 2.6倍 (17)

成績表

NAME	OUT	IN	GROSS	HDCP	NET	RANK
西島 毅	42	45	87	18	69	優勝
三村博通	45	45	90	16	74	準優勝
斎藤修弥	45	48	93	19	74	3位
児玉直彦	44	44	88	13	75	4位
皆川芳徳	44	42	86	9	77	5位
河合誠朗	53	53	106	29	77	6位
畠山正照	42	42	84	6	78	ベストスコア
熊谷弘夫	50	48	98	20	78	8位
森田益聿	53	57	110	32	78	9位
鴨井清貴	54	61	115	36	79	10位
斎藤光史	50	49	99	19	80	11位
鴨井清成	54	56	110	30	80	12位
村井玄乙	59	56	115	32	83	ブービー賞
神島茂夫	55	54	109	24	85	14位

編纂者の足跡

冠省

「波久鳥」御惠贈有難う。毎号楽しんで読んでいます。高田芳朗君が亡くなられたことは知りませんでした、彼の優れた絵はいつも感心して拝見していました。彼独特のデッサンの切れ味、青を主とした色彩など、他には見ない勝れたものでした。老生の三代後の日鉄の院長に就任しましたが、一代目の豊福 豊先生、益田祐治君、平間 章君いづれも鬼籍に入られ、古い者は老生のみとなってしまいました。

老生 室蘭在住二十六年に及びましたが、昭和三十年室蘭を去って青森に移住今年で既に三十五年に及び、老生も九十才を過ぎました。

顧みて室蘭当時の親しく交わった友人達の思い出は、今でも懐かしく蘇ります。斎藤義太郎先生、大久保慶之助先生その他国本、水科、織田、佐藤雄三諸先生らは既に亡く転た今昔の感に堪えません。現在御健在なのは柘植重夫先生のみとな

ってしまいました。御父君上田先生も御元氣でしたが、御母堂様は御健在でしょうか。

三年前室蘭市医師会の方々が青森に来訪され、本庄君、大岩君らとゴルフを楽しみました。老生も寄る年波で、今年は春から足痛を患い、とうとうプレイすることが出来ませんでした。冬中に治して来年はまたゴルフを楽しみたいと念願しております。また、来年は是非久し振りに室蘭を訪れ旧知にお目にかかりたいと思います。

先ずは無作法お詫び少々御礼まで

上田智夫様

青森市浪町一丁目二二二〇

佐藤 義臣

(二・二二・一一)

波久鳥の御送付、有難うございます。

小生のように室蘭に帰る機会のないものにとっては、皆様方の御活躍の状況を知る貴重なものです。加藤治良先生を中心とした各先生方の対談、藤兼先生の藝術論(?)等々なつかしい先生方の益々の御活躍御健筆を祈ります。

静岡市大谷三八〇〇―九二二

一方井 卓四郎

(二・二二・一一)

波久鳥をお送り下さりましてありがとうございます。仏前に供え、その後、愉しみに読ませていただいておりますので、私の元氣な間は、継続していただけたらと望んでおります。

室蘭市高砂町五―二二―一五

木戸 悦子

(二・二二・一一)

登別に二十五年くらして居りました。九州へ帰りましても、道南の話が出ない日はありません。御手数でしょうか今後とも御送り下さいます様御願ひ申し上げます。よい御正月をお迎え下さい。

福岡県福岡市西区豊浜一丁目一四―一

黒坪 弘毅

(二・二二・一七)

いつも波久鳥をお送り下され、心から感謝申し上げます。OBとして投稿をいつも思いながら、果たせず申し訳ございません。おゆるし下さい。十二月八日左記に転居しましたのでお知らせいたし

ます。次号には是非原稿をお送りしたいものと思つています。

有珠郡大滝村字優徳一五九

有路 智彦

(二・一二・一七)

異常現象の多い暖冬もこの一兩日はやうやく師走らしくなつて参りました。

年の瀬に室蘭への郷愁とも楽しみとも云へる「波久鳥」がございます。御厚意に甘えさせて頂きますものでしたら、お送り頂き度う存じます。会の御発展先生方の御消息は、新年の集いの話題でございませう。先ずは御礼旁々お願い申し上げます。益々御発展を祈り上げます。

東京都大田区蒲田四一―一

青山 芳江

(二・一二・一八)

「光陰矢の如し」とはよく言ったもの。年老いて、益々その感を深めて居る昨今の私です。今年も残り少なくなり、親交会の諸先生には御健勝で心忙しく年末を過ごして居られる頃と察して居ります。此度も亦「波久鳥」第十一号を御郵送下さつて、有難くなつかしく受取りました。

厚く御礼を申し上げます。

先づ沢山先生が御寄稿の「高田芳朗先生」の一文を読んで、深く胸を打たれ、衷心より御冥福をお祈り申し上げる次第です。

畑仕事も一段落し、今日二十日の町の仕事、最終の「健康相談」も終つてホッと致し、これからゆつくり楽しみに読ませてもらひます。

台風二十八号が一過した翌日の十二月一日は嘘のような快晴となり、その後連日快晴に近い日中気温二十度を越す暖かい珍しい異常と思える程のよい天気が続いて、快適な毎日を過ごして居りましたが、この後どうなるだろうかと少々不安な気も致し、何の異変もなければよいかと案じて居つた矢先！十一日夜六時頃、突然発生して県中央部を斜めに襲つた竜巻が茂原市の一部を中心に一瞬間の間に通る抜け、竜巻による被害としては未曾有の惨状の爪跡を残し、自然の猛威には今更ながら驚きました。他に館山市、鴨川市、銚子市の一部に物凄い電が降り、ピニール・ハウスのピニールに大穴があいて、中の冬野菜類や花卉類に大損害を与えました。幸い千倉町は通り路から外れ

ましたので、何の影響も被害もなく安心致し、あとでテレビや新聞記事や写真を見て、全くびつくり致しました。

日頃の御無沙汰をお詫び申し上げ、諸先生には一層御自愛下さつて、御健勝で新年を御迎え下さい。一筆御礼を申し上げます。

千葉県千倉町瀬戸二三六〇

高橋 清蔵

(二・一二・二〇)

波久鳥お届け下さいます有難うございました。御問い合せの件、室蘭の想い出はつきる事ないと存じますが寄る年波も考へ合せこの辺がよろしいのではと御返事申し上げます。その時になつて元氣なら又、お願い申上げるやも知れませんが、その折はよろしく。一寸旅行致し、留守でしたもので後れました事おゆるし下さい。諸先生の益々の御健勝を御祈り致して居ります。御礼まで。可しこ。

十五号まで希望

水戸市千波町三九五―二

松岡 志げ子

(二・一二・二三)

過日御親切に波久鳥11号お送り下され有難ふございました。(礼状がおくれて申し訳ありません)

皆様仲よく元気でやっておられる様子、何よりと思います。大久保先生は浜町の

大久保さんのお子様ですか。高田先生の絵をみたいものですな。室蘭も変わった様子、一度みたいものですな。有難ふございました。

新潟県亀田町船戸山四一四一六

五十嵐 進一

(三・一・八)

このたびはまた波久鳥第十一号をお送り頂き誠にありがとうございます。会員諸兄のご活躍をしのびながら、なつかしく読了致しました。お礼状を失念して居り、遅くなって申し訳ありません。

何れ定年を過ぎてルンペンになったら、また室蘭に戻って隠居し、医師会と親交会に復帰する積りでいますのでよろしく。

函館市広野町六番

広野町住宅四〇三一二二号

山本 健三郎

(三・一・三二)

拝啓 貴台益々ご隆昌の段お慶び申し上げます。

さて、この度「波久鳥」を御送付いただきまして誠にありがとうございます。

早速、当医師会・医師会立病院の運営ならびに学術研究の参考にさせていただきますと共に、永く当院の図書として保存させていただきます。

先ずはとりあえず書中をもって御礼申し上げます。

敬具

鹿児島県肝属郡大根占町神川一三五

肝属郡医師会

(二・二二・一〇)

親交会のおもな行事

○ 受賞祝賀会及び忘年パーティ

平成二年十二月十四日

於 室蘭プリンスホテル

○ 平成三年度定期総会・懇親会

平成三年五月二十九日

於 ホテルサンルート室蘭

○ 親睦旅行

平成三年七月六日・七日

札幌・石狩方面

○ 秋の行楽会

平成三年九月五日

於 ビアキャビンエレガ

会 員 移 動

平成2年10月～平成3年9月

年・月・日	事由	氏名
3・2・1	入会	稲川 昭
3・3・31	転出	安斎 哲郎
3・5・1	入会	嶋井 清貴
3・5・1	入会	西田 陸夫
3・5・2	入会	島 正一
3・5・2	入会	福永 純
3・5・9	入会	伊藤 謙治
3・5・10	入会	佐藤 東一
3・5・14	入会	勝俣 哲男
3・5・21	入会	河合 誠朗
3・5・22	入会	上田 憲次
3・5・22	入会	上田 哲史
3・6・1	入会	木下 博
3・6・30	転出	村上 俊吾
3・7・1	入会	国本 孝夫
3・7・1	入会	国本 えみ子
3・9・1	入会	横山 洋子

編集後記

今号は加藤編集長、大久保主幹が、忙しいとやら、腰痛とやらで、残った者に任せると云われて大恐慌。よって編集会議も難航し、委員の中には今やコンピュータで自動編集出来るんやから細かいことはよか、と煙にまく御仁やら、次の自民党総裁は誰かなど永田町ならぬ医師会論理を展開するやらの漫談会で先行きが危ぶまれた。みかねて最後は矢張り御両人が監修ということで無事出来した次第。

竹内先生のは、羨ましくも青春を共有した有名人の忘れ得ぬ風貌をたくまざる名文で綴られた。「三兆候一本槍」の高橋先生の節操の固いこと明治生れの頑固さなどとは申しますまい。脳死に関する万巻の書も脈々とした力強い文章に圧倒されそうです。が反論される向きは次号に。夫原性疾患は町医者でなければ得られない臨床体験から滲み出た山本名医のつぶやき。重いテーマかと思われた座談会もその人を得て軽やかに「波久鳥」風にま

とまり、吉井先生の原稿で締め括りが出来た按梅です。科学の側に立つ我々が魂の側に送るメッセージは何かを考えさせられ、信仰とは無縁の生活をしていて輪廻転生の観念薄く、さりとて人は死して土に還ると合理主義に徹することも出来ないでいる現代人に多くの示唆を与える有意義な座談会であったと自画自賛。

その他やさしくロマンチックな万葉集講座あり、御存知軽妙洒脱な寅さん紀行あり、中村先生のちよつといい言葉、親交会旅行を驚く程克明にレポートされた塩沢先生、鴨井先生、北海道ドクターズの様子を臨場感をもってお伝えいただいた安藤先生、以上寄稿された先生方に厚く御礼申し上げます。

毎度乍ら事務局の皆さんにはワープロ・校正等お世話になり本当に有難いことでした。

次号では今まで誌上に登場されていない先生方の投稿を是非お願いしたいものです。

(村井玄乙記)

「波久鳥」十二号編集委員

加藤 治良
大久保 洋平
澤山 豊
児玉 直彦
三村 博通
齋藤 美知子
村井 玄乙

親交会誌 波久鳥

発行日 平成三年十二月一日
発行所 室蘭市医師親交会
印刷所 室蘭印刷株式会社